

領域略称名：顔・身体学
領域番号：1901

令和4年度科学研究費助成事業
「新学術領域研究（研究領域提案型）」
に係る研究成果報告書（研究領域）兼
事後評価報告書

「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築
—多文化をつなぐ顔と身体表現」

領域設定期間

平成29年度～令和3年度

令和4年6月

領域代表者 中央大学・文学部・教授・山口 真美

目 次

研究組織

- 1 総括班・総括班以外の計画研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 2 公募研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

研究領域全体に係る事項

- 3 交付決定額・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 4 研究領域の目的及び概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
- 5 審査結果の所見及び中間評価結果の所見で指摘を受けた事項への対応状況・・・・・・・・ 10
- 6 研究目的の達成度及び主な成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- 7 研究発表の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
- 8 研究組織の連携体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
- 9 研究費の使用状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
- 10 当該学問分野及び関連学問分野への貢献の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
- 11 若手研究者の育成に関する取組実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
- 12 総括班評価者による評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

研究組織

(令和4年3月末現在。ただし完了した研究課題は完了時現在、補助事業廃止の研究課題は廃止時現在。)

1 総括班・総括班以外の計画研究

研究項目[1]	課題番号 研究課題名	研究期間	研究代表者 氏名	所属研究機関・部局・職	人数 [2]
X00 総	17H06340 トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現	平成29年度 ～ 令和3年度	山口 真美	中央大学・文学部・教授	2
A01 計	17H06341 顔と身体表現の文化フィールドワーク研究	平成29年度 ～ 令和3年度	床呂 郁哉	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授	5
A01 計	17H06342 顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究	平成29年度 ～ 令和3年度	高橋 康介	立命館大学・総合心理学部・教授	4
B01 計	17H06343 顔と身体表現の文化差の形成過程	平成29年度 ～ 令和3年度	山口 真美	中央大学・文学部・教授	1
B01 計	17H06344 顔と身体表現における顕在的・潜在的過程	平成29年度 ～ 令和3年度	渡邊 克巳	早稲田大学・理工学術院・教授	2
B01 計	17H06345 顔と身体表現における感覚間統合の文化間比較	平成29年度 ～ 令和3年度	田中 章浩	東京女子大学・現代教養学部・教授	2
C01 計	17H06346 顔と身体表現の比較現象学	平成29年度 ～ 令和3年度	河野 哲也	立教大学・文学部・教授	2
総括班・総括班以外の計画研究 計 7 件 (廃止を含む)					

[1] 総：総括班、国：国際活動支援班、計：総括班以外の計画研究、公：公募研究

[2] 研究代表者及び研究分担者の人数（辞退又は削除した者を除く。）

2 公募研究

研究項目[1]	課題番号 研究課題名	研究期間	研究代表者 氏名	所属研究機関・部局・職	人数 [2]
A01 公	18H04191 顔色—表情知覚の相互作用の文化・世代間比較	平成30年度 ～ 令和元年度	南 哲人	豊橋技術科学大学・工学部・准教授	1
A01 公	18H04192 牧畜民社会における感情の身体表現とその変化：東アフリカ・マサイの事例から	平成30年度 ～ 令和元年度	田 暁潔	筑波大学・体育系・助教	1

A01 公	18H04199 身体化された情動の文化化を探る—中国雲南省少数民族の身体的心性—	平成30年度 ～ 令和元年度	山田 祐樹	九州大学・基幹教育院・准教授	1
A01 公	18H04200 美しい／かわいい／不気味：顔情報変異の布置を用いたヒト普遍性／文化間変異の検討	平成30年度 ～ 令和元年度	橋彌 和秀	九州大学・人間環境学研究院・准教授	1
A01 公	18H04202 顔・身体表現から検討するトランスカルチャー下の装飾美	平成30年度 ～ 令和元年度	山本 芳美	都留文科大学・文学部・教授	1
A01 公	18H04203 ミニマルな顔表現の文化的差異に関する研究	平成30年度 ～ 令和元年度	金谷 一郎	長崎県立大学・情報システム学部・教授	1
B01 公	18H04180 Non-verbal communication through yawning	平成30年度 ～ 令和元年度	Tseng Chiahuei	東北大学・電気通信研究所・准教授	1
B01 公	18H04182 計算論的行動計測技術に基づく顔と身体表現における物理的対面の機能とその障害の解明	平成30年度 ～ 令和元年度	松田 壮一郎	筑波大学・人間系・助教	1
B01 公	18H04183 顔の色と情動認識の異文化比較	平成30年度 ～ 令和元年度	溝上 陽子	千葉大学・大学院工学研究院・教授	1
B01 公	18H04185 社会的相互作用を支える無意識の対人間協調ダイナミクス	平成30年度 ～ 令和元年度	三浦 哲都	早稲田大学・人間科学学術院・准教授	1
B01 公	18H04186 社会的顔認知とその多様性の心理物理学的解析	平成30年度 ～ 令和元年度	本吉 勇	東京大学・総合文化研究科・准教授	1
B01 公	18H04193 顔に由来する社会的価値が顔の記憶に与える影響とその神経機構の解明	平成30年度 ～ 令和元年度	月浦 崇	京都大学・人間・環境学研究科・教授	1
B01 公	18H04194 顔・身体認識理解への統合認知進化的アプローチ：「発達—文化—進化」の観点から	平成30年度 ～ 令和元年度	友永 雅己	京都大学・霊長類研究所・教授	1
B01 公	18H04195 複数人場面における個人特性と関係性の認知：表情手がかりの効果	平成30年度 ～ 令和元年度	上田 祥行	京都大学・こころの未来研究センター・特定講師	1
B01 公	18H04197 大脳皮質処理と皮質下処理が顔認知に与える影響：計算モデルと心理実験による検討	平成30年度 ～ 令和元年度	稲垣 未来男	大阪大学・生命機能研究科・助教	1

B01 公	18H04198 可視的変形の手術後における自己顔の再認知過程	平成30年度 ～ 令和元年度	社 浩太郎	大阪大学・歯学研究科・招聘 教員	1
B01 公	18H04201 個体関係認知の神経基盤とそのトランスカルチャー比較	平成30年度 ～ 令和元年度	岡本 正博	福島県立医科大学・医学部・ 助教	1
B01 公	18H04205 顔面表情認知にしぐさ・姿勢が及ぼす影響に関する実験的検討	平成30年度 ～ 令和元年度	渡邊 伸行	金沢工業大学・情報フロン ティア学部・准教授	1
B01 公	18H04206 他者心理の手がかりとしての表情理解に関する哲学的・認知科学的研究	平成30年度 ～ 令和元年度	長滝 祥司	中京大学・国際教養学部・教 授	1
B01 公	18H04207 他者の視線が自己の行動に与える影響の文化差：二者同時記録 fMRI を用いた検討	平成30年度 ～ 令和元年度	小池 耕彦	生理学研究所・システム脳 科学研究領域・助教	1
B01 公	18H04208 深層学習による顔・身体画像表現の異文化差の解明	平成30年度 ～ 令和元年度	林 隆介	産業技術総合研究所・情報・ 人間工学領域・主任研究員	1
C01 公	18H04187 日本、中世の絵巻物にみる人物表現の顔と身体の表情に関する研究	平成30年度 ～ 令和元年度	宮永 美知代	東京藝術大学・美術学部・助 教	1
C01 公	18H04189 身振り概念の変化のメカニズムに関する美術史的考察—古代ギリシア・ローマ美術から	平成30年度 ～ 令和元年度	田中 咲子	新潟大学・人文社会科学系・ 准教授	1
A01 公	20H04569 お辞儀が印象形成に及ぼす影響の文化間比較	令和2年度 ～ 令和3年度	大杉 尚之	山形大学・人文社会科学部・ 准教授	1
A01 公	20H04570 現代マサイ社会における身体表現と認識：相互行為の場に着目して	令和2年度 ～ 令和3年度	田 暁潔	筑波大学・体育系・助教	1
A01 公	20H04581 フィールドラボ循環型アプローチによる身体化された感性の研究	令和2年度 ～ 令和3年度	山田 祐樹	九州大学・基幹教育院・准教 授	1
A01 公	20H04583 イレズミ・タトゥーにおけるトランスカルチャー性の比較研究	令和2年度 ～ 令和3年度	山本 芳美	都留文科大学・文学部・教授	1
B01 公	20H04568 衛生マスクが生み出すポジティブ・ネガティブな顔遮蔽効果	令和2年度 ～ 令和3年度	河原 純一郎	北海道大学・文学研究科・教 授	1

B01 公	20H04571 コミュニケーション基盤としての顔-身体コーディネーション	令和2年度 ～ 令和3年度	工藤 和俊	東京大学・総合文化研究科・准教授	1
B01 公	20H04573 身体表現における複層的な演者間インタラクションの定量的検討	令和2年度 ～ 令和3年度	清水 大地	神戸大学・人間発達環境学研究科・助教	1
B01 公	20H04576 脳内電極脳波による顔・身体学と情動・社会性の研究	令和2年度 ～ 令和3年度	飯高 哲也	名古屋大学・脳とこころの研究センター・教授	1
B01 公	20H04577 複数人場面における関係性の認知：発達と文化特異的な認識の発生	令和2年度 ～ 令和3年度	上田 祥行	京都大学・こころの未来研究センター・特定講師	1
B01 公	20H04578 大脳皮質と皮質下における顔表情処理の比較：文化間の差異と普遍性に注目して	令和2年度 ～ 令和3年度	稲垣 未来男	大阪大学・生命機能研究科・助教	1
B01 公	20H04579 顎骨形成術後の顔面頭頸部の知覚・運動と自己身体認知との間の因果関係	令和2年度 ～ 令和3年度	社 浩太郎	大阪大学・歯学研究科・招聘教員	1
B01 公	20H04580 深層学習を用いた身体表現文化差の検討	令和2年度 ～ 令和3年度	内藤 智之	大阪大学・医学系研究科・講師	1
B01 公	20H04586 対人インタラクションにおける脳・身体同期への文化差の影響	令和2年度 ～ 令和3年度	大須 理英子	早稲田大学・人間科学学術院・教授	1
B01 公	20H04587 相互注視の回避に関わる生理心理学的メカニズムの解明	令和2年度 ～ 令和3年度	磯村 朋子	名古屋大学・情報学研究科・准教授	1
B01 公	20H04592 意味・感情の身体表現のエッセンスを探る -ロボットを用いた検証と応用-	令和2年度 ～ 令和3年度	上田 悦子	大阪工業大学・ロボティクス&デザイン工学部・教授	1
B01 公	20H04594 パーソナルスペースの定量的な計測方法の開発	令和2年度 ～ 令和3年度	小池 耕彦	生理学研究所・システム脳科学研究領域・助教	1
B01 公	20H04595 トランスカルチャーとしての発達障害者における顔・身体表現	令和2年度 ～ 令和3年度	和田 真	国立障害者リハビリテーションセンター・脳機能系障害研究部・研究室長	1
B01 公	20H04596 扁桃神経活動が霊長類の顔認知・情動反応・視覚皮質神経活動に及ぼす影響	令和2年度 ～ 令和3年度	宮川 尚久	量子科学技術研究開発機構・放射線医学総合研究所・研究員	1

B01 公	20H04597 顔・身体表現の情報工学に基づくトランスカルチャー比較	令和2年度 ～ 令和3年度	林 隆介	産業技術総合研究所・情報・人間工学領域・主任研究員	1
C01 公	20H04574 Embodiment, ethics, And Humanism: The Face-Body Studies of Colonial Cinema	令和2年度 ～ 令和3年度	小田桐 拓志	金沢大学・GS教育系・准教授	1
C01 公	20H04575 「能」における感情移入と共同性の哲学的探求一面（顔）と所作（身体）を中心にー	令和2年度 ～ 令和3年度	小谷 弥生	日本女子大学・人間社会学部心理学科・学術研究員	1
C01 公	20H04585 トランスカルチャー状況下における身体化された自己	令和2年度 ～ 令和3年度	田中 彰吾	東海大学・スチューデントアチーブメントセンター・教授	1
C01 公	20H04588 障害者と家族間における文化の独自性の解明：家庭内／外相互行為の分析を通して	令和2年度 ～ 令和3年度	牧野 遼作	広島工業大学・情報学部・助教	1
C01 公	20H04591 表情・身体動作の理解と一人称報告の信頼性に関する哲学的・経験科学的研究	令和2年度 ～ 令和3年度	長滝 祥司	中京大学・国際学部・教授	1
C01 公	20H04593 縄文・弥生時代のトランスカルチャー状況（地域間交渉）と「顔・身体」装飾付土器	令和2年度 ～ 令和3年度	中村 耕作	國學院大學栃木短期大学・日本文化学科・准教授	1
公募研究 計 48 件（廃止を含む）					

[1] 総：総括班、国：国際活動支援班、計：総括班以外の計画研究、公：公募研究

[2] 研究代表者及び研究分担者の人数（辞退又は削除した者を除く。）

研究領域全体に係る事項

3 交付決定額

年度	合計	直接経費	間接経費
平成 29 年度	114,790,000 円	88,300,000 円	26,490,000 円
平成 30 年度	146,510,000 円	112,700,000 円	33,810,000 円
令和元年度	162,760,000 円	125,200,000 円	37,560,000 円
令和 2 年度	133,510,000 円	102,700,000 円	30,810,000 円
令和 3 年度	135,460,000 円	104,200,000 円	31,260,000 円
合計	693,030,000 円	533,100,000 円	159,930,000 円

4 研究領域の目的及び概要

研究領域全体を通じ、本研究領域の研究目的及び全体構想について、応募時の領域計画書を基に、具体的かつ簡潔に2頁以内で記述すること。なお、記述に当たっては、どのような点が「革新的・創造的な学術研究の発展が期待される研究領域」であるか、研究の学術的背景や領域設定期間終了後に期待される成果等を明確にすること。

顔と身体は個人の由来を常に露出・顕著に表現し、その個人が何者であるかを解読可能とする、隠すことのできない媒体である。グローバル化が加速する中で、顔と身体を介して無意識に行ってきた営みを意識化し、個々人の中で「当たり前」とされてきたことを再考することを目的として本領域を立ちあげた。すなわち、異質なものが共存する社会の中での顔と身体表現が持つ可能性と、顔と身体を使いこなすことにより異文化理解を促す可能性を、心理学・文化人類学・哲学の視点から、既存の研究分野の枠組を超えて検討していく。

メールやライン・ツイッターの使用など、インターネットの普及により、世界に向けて気軽に意見を発信できるようになったが、言語を媒体として利用したとしても、感情をダイレクトに表すのは「顔文字」であったりする。世界に向けて自分自身を示すプロフィール写真で使われるのも「顔」であることから、インターネットの普及により、現代社会に生きる人類は、これまでにない大量の顔と身体表現にさらされることとなった。顔や身体という媒体において、われわれの社会はかつてないほどに膨大に広がっている。これに伴い、顔のイメージの越境も進んでいる。テレビや新聞などのメディアが普及する以前は、覚えなくてはいけない顔の数は身内や親戚程度にとどまっていたのに対し、これらのメディアに加えてインターネットまでも普及した現代では、世界各国の美男美女を見る機会に恵まれ、顔の尺度は変わってきたのではないだろうか。その間には、どのような違いがあり、どのような精神的・物理的な負荷が生じているのだろうか。

一方でこれまでアンタッチャブルとされてきた「異文化」は、手つかずのまま意識外に存在している。そもそも人は分類する特性があることから、自分と違う肌の色、自分とは違う身振りや手ぶりに感覚が高く、そこに社会的学習によって異質なものに対する忌避感が成立することになる。一方、それぞれの社会で個人が適応していくためには顔は重要な道具であることから、生まれ育った家族や社会的背景による差異がある。自分と肌の色が違う人々を違う目で見ってしまう、異なる身体表現を持つ人々やヴェールをかぶった女性に対し違和感を抱いてしまうといった、互いにとっての異質を捉え直す時期にある。意識下で「身体的に知ること」を封印してきたことに対し、意識化して理解すべき段階にあると考える。

本研究領域では顔と身体表現の無意識を意識化すること、自身の潜在的な感覚を明らかにすることを、現代社会が直面しつつある「トランスカルチャー状況下」への解決策のひとつとして位置づける。トランスカルチャー状況とは、「文化」の壁を取り壊す力とそれを作る力が同時に働いているような状況をさす。それはアイデンティティの改変と維持、変身と固定が並行して生じるような状況で、移民や外国人労働者、海外からのインバウンド観光客などの受入が拡大する一方で、ヘイトスピーチなどといった異なる文化や社会を受け入れる「壁」を目の前にしたアンビバレンツな状況が存在する。本領域で扱っている、「刺青」をした外国人客に対する、銭湯などの施設の対応はその一例である。複数の地域文化や価値観が混在する状態からそれらが交じり合う社会へと転換していく中で、人はどのようにこれまで学習した地域性を重んじて壁を作るか、その一方で、どのように壁を越え新たな社会を構築していくのか、その苦しみとそれを乗り越えて再び適応していくことについて、人が持つ原始的な媒体である顔と身体を対象に、個々人の認知や感覚の視点から解明を行う。顔と身体について考えることは、科学技術の進歩により生じる、身体性の変容や身体加工までも考察の範囲におさめるものである。

顔や身体は目前に物理的に存在する対象であるため、多様な分野の共通の研究対象とすることができる。本領域では、現実の顔や身体表現とその認識様式を実験的に分析し、多様性とその背景となる要因を調査し、そこから個と社会のメカニズムの解明と再考を行う。また、過去の絵画や土器などにみられる顔や身体表現の解析から、その時代の社会背景を解析し直すことや、現代社会が持つ隠された病理や可能性についても顔と身体表現から再考する。すなわち、心理学、文化人類学、社会学、脳科学的な手法の適用をしつつ、美学、化粧学、歴史学などの観点から、顔と身体表現を通して時代や社会を考察する。このように様々な領域の様々な観点から顔や身体は研究対象となり、それぞれの知見を交流させることにより、「既存の学問分野の枠に収まらない新興・融合領域の創成を目指すもの」として、顔という統一的な対象を用いて再考する。誰もが他者の視線にさらされ続け必ず持っている「顔」と「身体」という対象を用いて、人文・社会科学分野を再構築する。さらには我々日本人ならびに世界が目の前に築いている「壁」について、「トランスカルチャー」という概念から、壁を壊しつつ壁を作り上げる人類の特性について個のあり方に焦点を当ててとらえていくことを目的として立ち上げた。

心理学・認知科学の研究では、ふだん意識することのない視線の動きの解析により、顔を見る際の差異が解明されている。顔を見ることの違いを探る新たな手法としてはアイトラッカーの解析手法がある。アイトラッカーを使い顔のどこを見ているかの違いを解析することにより、これまで信じられてきた表情認識の通文化性の神話が崩壊しつつある。古くはダーウィンを起源とし、1980年代に心理学者P.

エクマンにより示された喜怒哀楽といった基本表情カテゴリーに対して、これらの手法を使った研究により、欧米文化圏と東アジアの間に違いがあることが注目されている。基本的な違いの研究の蓄積から、それぞれの地域環境背景をより詳細に調べるべき段階にある。さらに発達科学の研究から、こうした自身の生まれた地域環境への適応は生後一歳に満たずして成立することもしられている。顔の適応は母国語の獲得と同様の時期に、これまで見てきた顔と声によって成立することが示されている。顔への経験の少ない生後半年以下の乳児は、人種を超えてサル顔までも区別でき、この時期はあらゆる言語を聞き取ることもできる。それが環境適応に従い、耳にすることのない外国語の聞き取り能力も、目にすることのない異なる言語を話す顔を区別する能力も、失っていくのである。こうした適応過程の研究成果を踏まえることにより、またさらに詳細な研究を展開することにより、トランスカルチャー状況下の中で我々人はどのように適応していくかの指針を考えることができるであろう。

新たな視点からの顔認知の学習プロセスの解明については、近年の顔認知モデルにおいて、短時間に集中して顔を見る順応による顔認知の変容が検討されている。本領域では、こうした顕在的な学習とともに潜在的な学習を視座に入れた検討を行う。すなわち顔を社会的コミュニケーションに利用する際には、社会的な存在である顔を情動とともに「親しい個人」として処理することが根底として必要だが、その際には顕在的な認知処理とともに情動システムを含む潜在的な処理過程が関わる可能性があり、このように「意識にのぼる顔」と「意識にのぼらない顔」を軸として、顔認知の新しいモデルを提案する。またフィールドワークを含む文化人類学の手法を併用することで、異なる地域の実際の生活の現場における顔や身体表現をめぐる差異とその意味についても比較検討が可能となり、これまでの先行研究では看過されがちであった実際の生活の現場の文脈における顔や顔と結びついた身体表現に関してもより詳細で正確な研究が可能となる。そこでは狭義の顔はもちろん、顔を含む各種の身体的表現、衣服、装飾、仮面、ヴェール・スカーフなど顔と身体表現に深く関わる項目に関してフィールドワークの手法を通じて各地域や文化ごとの差異と共通性などが解明されることが期待される。

このプリミティブな身体表現の意識化されていない点を意識化することにより、それぞれの地域社会の中で閉じられたコミュニケーションを理解し、他者や異質性の受容を導きたい。顔と身体表現に関する共通性と異質性を、個人内・外・間という三つのレベルで多層的にあぶり出すことで、東アジア文化圏に位置する日本の人文科学から新たな研究領域を構築する。

顔や身体表現の個性や地域や社会の固有性について、意識化されない部分をあぶりだして意識化することにより、それぞれの違いを正しく認識することができる。顔や身体表現の違いとそれを見ることの違いを読み解き、理解し、そこから他者や異質なものの心、時代や社会について再考する機会を作り出したい。

顔とは個々人がこの社会で適応していく上で可変性を求められる道具であり、どう使いこなすかが人それぞれ異なる。特に男女の違いは大きく、顔の表現こそが限りない可能性を持つことは、化粧の研究からも示される。化粧による容貌の変化は整形をしのぎ、心理的変容へのその効力は計り知れない。こうした変化により私たちの実存はどう変わるのか、ヴァーチャル・リアリティが現実味を現しつつある現在、私たち自身はそれぞれが持っている顔身体を超えていくのかについて考察することは重要な段階にある。それは男女という境界の設定を超えたトランスジェンダーの考察にもあてはまる。

国内外でグローバル化が強く叫ばれる中で、個々の違いの理解にもとづいた真のグローバル化の視座を人文科学から発信する。昨今、宗教的・信条的な対立は世界各地で勃発し、その融和はなかなか難しいように見える。背景となる概念や文化的な違いから、さまざまなすれ違いを産み出す可能性があり、時に生じるインターネット上でのトラブルなどからも、言葉だけのコミュニケーションだけでなく、よりプリミティブであるが故に文化を超えたコミュニケーションの可能性を持ち、それぞれの文化固有の可能性を秘めた顔と身体表現の再考の必要性が感じられる。ふだん意識することのない、顔と身体表現を意識化し再考察することにより、異質な他者を理解する視座を提供する。

本申請では心理学、文化人類学などの実証的なアプローチに加え、顔と装いに関する哲学的な視点も取り入れることで、アカデミックな領域のみのインパクトを越えて、広く社会全体にトランスカルチャーの意義と視点を広げていくことができると考える。哲学は言葉と概念を駆使し、個々の事実とその解釈を一つの表象へとまとめ上げていく作業でもある。顔をめぐると他者理解／異質性の理解の問題を、広く社会に啓蒙していく手段を模索する。また、哲学をベースに化粧や装いについても広く考察しながら、ヴェール・スカーフや仮面などがもつ社会的意味を考察し、女性ならではの視点から広く啓蒙していくことが可能となる。本申請では心理学と文化人類学・哲学を基礎として、人文社会科学の様々な領域の枠組みを融合することにより、共通の視座と手法を用いてこれまで捉えきれなかった顔と身体表現を分析的に捉え直すことにより、新たな視座から「顔と身体表現」によるトランスカルチャーの理解を模索していく。最終年度には国際シンポジウムを開催し、顔身体学のテキストおよび学術雑誌の公刊と、研究分野に倫理を提供することにより、分野を超えた顔身体学の確立を目指す。

5 審査結果の所見及び中間評価結果の所見で指摘を受けた事項への対応状況

研究領域全体を通じ、審査結果の所見及び中間評価結果の所見において指摘を受けた事項があった場合には、当該指摘及びその対応状況等について、具体的かつ簡潔に2頁以内で記述すること。

(審査結果の所見において指摘を受けた事項への対応状況)

【所見】研究計画書全体を通して文化に関する概念についての統一的検討が不足していることに加え、本研究領域における複合的な知見をいかに統合するのか、といった課題もあり、領域内での有機的なつながりを一層促進するための工夫や、計画研究組織間の連携強化が望まれる。

領域内の結びつきを強めるため、領域会議の場を活用し、分野を超えたテーマ別分科会など交流の場を設定した。領域も後半になると共通テーマが見えてきたため、顔・倫理・フィールドにかかわるテーマ別の分科会を企画し、さらなる議論は Slack 上の文字ベースで行うなどの工夫をこらした。領域会議での公募班と計画班の発表も Slack 上で議論をできるように設定したところ、時間内で質疑応答するというこれまでの発表形式とは異なり分野を超えた議論が長く続く現象がみられ、領域内の有機的なつながりを促進することができた。また若手より他分野の研究手法を学びたいという意見が出たため、コロナ下の時間を使って各研究分野の手法を学ぶ Zoom 勉強会を行い、2020年4月から7月まで計6回、各回の参加者は50名前後にも上る中で、若手の分野横断な研修の機会を提供できた。

領域の結びつきを実証する最大の成果として、『顔身体学ハンドブック』（業績84）を刊行したことがあげられる。これは総括班の編集に公募班も加わった成果であり、作成にあたっては分野間の用語の統一は最も重要視された。このように一冊のテキストとして完成したことは領域内の分野の融合を示す最も重要な成果である。また分野融合である顔身体学の国際的位置づけを示すための欧文誌 *Philosophy & Cultural Embodiment* を刊行することができたことも重要な成果である。

【留意事項1】総括班の位置づけが曖昧であり、その活動が消極的な印象があるため、複合的領域の創造に必要な「研究上の役割」（理論的枠組みの設定、そのための研究活動、多くの領域を含むプロジェクトの研究成果をまとめていく上での方法など）を強化することが必要である。

総括班は、国際シンポジウムを13回、国内シンポジウムを26回開催するなど、領域内外の議論の場を積極的に作る役割を担った。また、アウトリーチ活動として、文化人類学・心理学・哲学それぞれのトピックで哲学カフェの開催を行った。その一方で若手研究者養成に焦点をあてた若手研究会を組織し、次世代の育成を基盤に複合領域の創設につとめた。若手主催の若手公開研究会を毎年行い、また異分野の手法を学ぶ勉強会を Zoom により開催し、若手の他領域の教育育成に貢献できた。

総括班は、国際活動支援においても重要な役割を担っており、海外機関への派遣8件、海外機関からの研究者招聘25件を支援した。2020年2～3月には欧州の複数の大学に若手研究者3名を派遣し、現地でそれぞれの分野の第一人者の指導の下、実験を推進した。現地滞在中は若手の国際交流が加速し、持続的な国際連携体制の基盤が強化された。また、総括班では、海外の著名な専門家を査読者に招いた、哲学・心理・認知科学・人類学・社会学・美学などの分野に渡る領域横断的な欧文誌 *Philosophy and Cultural Embodiment* をオンラインで2号刊行し、主に顔身体学の基礎理論に関わる論文を掲載している。3号以降も継続的に発刊していく予定である。

分野を超えた統一的観点を示すため、2020年以降は東京オリンピック・パラリンピックを踏まえた身体への受けとめ方、特にパラリンピックを踏まえた障害のある身体への受けとめ方の現在について、シンポジウムを複数企画した。パラリンピックの開会式でダンスを披露した義足のダンサーによる「表現する身体と見つめる身体：森田かずよ氏（義足のダンサー）×井桁裕子氏（人形作家）」（2021.9.26）では、障害のある身体への受けとめ方について考える機会を文化人類学や哲学の視点で提供した。無観客となった状況を再考するため、シンポジウム「シンクロする身体」（2021.11.07）では、オリンピックである小谷実可子氏・田中ウルヴェ京氏を迎え、フィールドワーク研究から一体感の経験が社会に与える影響について、センシング技術を使った集団パフォーマンスの最大化の試み、アスリートの観点から、選手・観客を含めた身体のシンクロをテーマに議論ができた。これに先立ちシンポジウム「障害と身体運動、間身体的交流」（2020.12.28）では、日本財団パラリンピックサポートセンターのマセゾン美季氏を迎え、中途障害から道具を使用したスポーツの取り組み、身体とその拡張という点から議論が行われた。

障害受容としてはこれに先立ち心理学と哲学で臨床神経であり現象学にも強いボーンマス大学 J. コール教授を招聘し、日本心理学会でのシンポジウム（2019.9.11）では、当事者である神戸大学の稲原美苗教授と大阪大学の P. M. ギラン博士を迎えた議論を行い、臨床神経医学者と臨床神経学とでワークショップを行うなど（2019.9.16）広く議論を深めてきた。このワークショップには、短期で河野の元で学んでいた中国人留学生3名を招待し、上記の J. コール教授とのワークショップでコメント・質疑応答をしてもらった。

一方で顔と身体を研究対象とする上での倫理については、領域会議での講習会や分科会を重ね、哲学班主導で倫理講習のビデオを作成し、2022.3.12にはシンポジウム「顔認証倫理—デジタルリスクとその克服」を開催し、AIを顔に応用することに固有の問題や、データの選別にバイアスが入り込む危険性、そもそも顔の倫理は個人主義的なものであるのか共同体的なものかといった、顔の倫理にまつわる応用から根本的な話題にいたるまで一般に向けて広く活発な議論を行うことに専心した。

【留意事項 2】例えば「トランスカルチャー」「異なる文化間」「異文化性」「文化差」とは何を意味するのか、あるいは、定義もないままに文化的な単位として「東アジア」といった用語を用いるなど、文化に関する用語の定義や使い方の統一がなされていないという指摘が複数あったため、本研究領域の根幹に関わる概念については、総括班を中心に整理が必要である。

本領域が提案している「トランスカルチャー」の概念についての統一的検討を深めるため、多くのシンポジウムを行った。その集大成の一つが 2020 年の国際シンポジウム「ミックスレイスの顔身体表象—学際的研究を目指して」で、「哲学×社会学×コミュニケーション学」「批判的人種理論×文化人類学×社会学」「心理学×認知科学」という 3 つのセッションに分かれ融合的にトランスカルチャーについての議論を披露した。トランスカルチャーにおける顔と身体に生じる問題として、人種といわゆるハーフという概念における問題と、国際養子や無国籍者から、斉一的な共同体を前提として人種や文化を認識する場合に陥りがちな陥穽と、顔を人種といったカテゴリーに分類する人間の傾向について、認知科学・文化人類学・哲学の視点から分野横断的に議論することができた。

トランスカルチャーの概念についての議論も、領域会議や公開シンポジウムにおいて継続して行い、そこに生じる事象として境界確定と越境、分離と融合、アイデンティティの安定化と再構築という矛盾した二方向の力のせめぎあいが生じること、刷新された文化概念を基礎として本領域における様々な知見を統合し、領域内での有機的なつながりを広げることができた。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所主催の公開シンポジウムを毎年行い、トランスカルチャー状況という場の重要性、越境することの危険と意義について議論を重ねた。また日本科学未来館の「ヴァーチャル世界でワタシはどうなる？」などのシンポジウムで、技術革新により自分が所有しているはずの顔や身体が変容することへの身体性への問いについて、哲学班、心理学班、文化人類学班それぞれの視点から身体性の越境について議論を深めた。

【留意事項 3】研究計画「A01-P01」と「A01-P02」については例えば、研究対象領域と被観察者を両組織間で重ねることによってより深いデータの比較検討が可能となることが期待されることから、両計画研究間の連携の強化が必要である。

A01-P02 高橋班のフィールド実験は、計画班の A01-P01 床呂班と公募班である A01-K202 ケニア田班、A01-K203 中国雲南山田班と連携を進めた。またフィールド研究で得られたデータを認知情報系・身体情報系の公募班 B01-K215・B01-K202 と共有し、解析を発展させる研究も行った。2018 年 3 月床呂班主催のバリ島ワークショップでは高橋班のチュートリアルを実施し、バリ島にて床呂班メンバーがデータ取得にあたり、2018 年 6 月に高橋班が企画した文化人類学会分科会に床呂班も参加しフィールド実験の可能性を議論し、以降、高橋班のフィールド実験は床呂班の担当フィールドで実施された。例えば床呂は 2018 年から 19 年にかけてフィリピンにおいて高橋班の開発した顔描画実験を実施した。さらにコロナ下で行われた 2020 年の領域会議の分科会において、フィールドワークと実験心理学のオンライン化とリアルなフィールドの重要性について深い議論を行うことができた。更に 2021 年 12 月にオンラインで実施したシンポジウム（通称「顔シンポ」）も企画段階から床呂班と高橋班の連携において実施した。コロナ下という厳しい状況で当該班同士だけではなく領域内において深い連携を作り上げたことは意義深いことであった。

（中間評価結果の所見において指摘を受けた事項への対応状況）

【留意事項】やや進捗が遅れている研究項目もあるが、基礎データの集積が進めば進展は早まると期待される。

すべての計画班に進捗の遅れはなかったものの、B01-P02 渡邊班の表情データベースを“なるべく早期に公開できるように調整・検討を行っている”という表現が進捗の遅れとみなされていたようであったが、研究は計画通りに研究目的での共有や活用はすでに進んでいる。現在も特段の問題はなく、ウィーン大学との共同研究や領域内での研究として成果を発信している。その後、コロナの影響は受けたものの、各計画班は研究の場をインターネットコミュニティのフィールドワークやオンライン実験に素早く切り替えることにより成果を達成し、2022 年には国際シンポジウムを迎えることができている。このように、当初の設定目標に照らして社会的・学術的に十分な成果を挙げたと総括することができる。

【留意事項】今後は、従来の文化比較研究を超えた新たな研究領域として、持続的に発展していくことを目指し、より一層の連携の取り組みに期待したい。

本申請では、東京オリンピック・パラリンピックを踏まえた後に日本が迎える多くの外国人観光客が混在するトランスカルチャーという状況について顔身体から考えるという目的で研究を行った。コロナという影響はあったものの、フィールドや実験をオンラインに切り替えてデータ収集に努めた。オリンピック・パラリンピックは 2021 年に延期され無観客開催となったが、その意義を考えるべくオリンピックを迎え身体による統一感について分野融合的に検討するシンポジウムを開催し、またパラリンピックの体験に基づき、障害者受容をトランスカルチャーの一つの受容として捉える試みを行った。こうした観点の獲得により、問題を抱えたりアルな顔身体を受け入れるという新たな顔身体を考える視点を発見し、学問分野融合に向けて更に強い先端的な展開を図る対象を導き出すことができた。

6 研究目的の達成度及び主な成果

(1) 領域設定期間内に何をどこまで明らかにしようとし、どの程度達成できたか、(2) 本研究領域により得られた成果について、具体的かつ簡潔に5頁以内で記述すること。(1)は研究項目ごと、(2)は研究項目ごとに計画研究・公募研究の順で記載すること。なお、本研究領域内の共同研究等による成果の場合はその旨を明確にすること。

(1) 研究目的の達成度

A01 顔と身体表現の異文化性検討

A01 では、多様な研究アプローチのフィールドワークを通して顔と身体表現の文化依存性・多文化性の解明を目指した。計画班 A01-P01 は人類学的フィールドワークを含むフィールドサイエンスの研究手法を駆使し、海外各地における顔・身体表現に関して具体的な文化・社会的文脈に応じた比較研究の遂行を目的とした。東南アジア島嶼部の顔と装飾、インドネシアのバリ島芸能、ジャワ島など東南アジアの女性イスラーム教徒、東アフリカ・ケニアと中東湾岸諸国における身体表現など、各地でフィールドワークを実施した。令和2年度以降はコロナ禍により海外現地調査が難しくなった状況に鑑み、オンライン・フィールドワークなどの代替的手段も導入しながらの研究を実施した。これらの研究から衣服、装飾、仮面、ヴェール、さらに後半にはマスク着用状況や新型コロナウイルスの擬人化表現などの顔と身体表現の異文化性への考察を行った。計画班 A01-P02 ではフィールド実験を通して顔や身体表現による感情の表出と認識の多様性について解明することを目指した。2017年から継続してタンザニア、カメルーン、ケニア、ヨーロッパ、東南アジアなどのフィールドにアクセスしタブレットを利用したフィールド実験研究を実施した。その結果、表情のみならず、顔認識そのものの多様性が示されるに至り、西洋中心心理学が長く常識としてきた顔認知の枠組みに疑問を呈する結果が得られた。また本研究項目では実験心理学と人類学の融合による新たな研究アプローチの確立と実践を目指した。A01-P01 班主催による多研究班融合のためのシンポジウムの定期開催、A01-P02 計画班内での相互乗り入れの研究実践に加え、A01-P02 の研究手法を A01-P01 のフィールドに持ち込む、公募班と連携したマルチフィールド研究を展開するなど進展があった。以上、研究項目 A01 は海外でのフィールドワークを中心的な研究手法とし、研究期間後半ではパンデミックの中で困難な状況に直面しつつも、当初掲げた研究目的の大部分を達成し、一部のトピックについては当初の目標を超える達成度を得られた。

B01 顔と身体表現の異文化を作り上げるメカニズムの解明

B01 では、実験的手法を用いて顔と身体の高多様性と文化差のメカニズムを解明すること、さらにはその形成過程とメカニズムを探ることを目指した。そのため行動実験のみならず、脳波や fMRI・fNIRS (近赤外分光法) などの脳計測やアイトラッカーを用いた眼球運動計測、皮膚電位反応をはじめとした生体計測などを駆使し、顔と身体への顕在的・潜在的な処理過程を明らかにすることを試みた。こうした手法に基づいた異文化比較研究、適応過程を検討するための移民を対象とした研究にも着手し、コロナ前は対面実験で、コロナ以降はオンライン実験に切り替えて異文化比較データを収集した。

計画班 B01-P01 では、顔身体の高文化差の形成過程に主眼を置いた実験研究を行なった。その脳内機構の発達を fNIRS を用いて明らかにし、顔と身体の高脳内処理が生後半年で生じることを示すなど世界初の成果をあげている。さらには生後1歳未満の乳児の顔へ向ける注意のメカニズムなど世界に先駆けた成果を多くあげている他、声と口の動きの不一致から生じるマガーク効果を中心に、異文化比較研究も行った。また日本と海外でのコロナ下の顔認知発達に関するシンポジウムなども企画するなど、業界をけん引する役割を果たしている。

計画班 B01-P02 では、顔身体における認知行動の潜在的・顕在的過程について実験心理学的・神経科学的手法を用いた研究を幅広く進めてきており、顔印象の顔構造統計モデル、視線と頭(身体)の向きの相互作用、内受容感覚、身体動作の主体感などの研究を一流の国際雑誌に発表するとともに、コロナ以降はオンラインでの文化比較の実験プロトコルを作成し、顔の弁別や眼球運動への自他文化の影響など研究として着実に発表している。

計画班 B01-P03 では、顔と身体の高文化差の形成過程について、主として感覚間統合の視点から、幼児期から成人を対象とした大規模発達実験、脳・生理計測実験を推進した。顔・身体・声・タッチ、およびそれらの相互作用から生じる感情知覚の特性を明らかにし、移民の異文化再適応過程を fMRI 実験で捉えることに成功するなど、顔と身体に支えられた多感覚コミュニケーションとその形成過程を多面的に浮き彫りにすることができた。さらに、子どもを対象としたオンライン実験手法を世界に先駆けて確立さ

せ、コロナ禍における発達研究の方向性を示した。

以上のような着実な研究活動によって、顔と身体の高多様性と文化差、およびその形成過程に関わる認知過程、脳内過程が明らかにされ、今後のさらなるメカニズムの解明の基盤となる知見を蓄積できていることから、顔と身体表現の異文化を作り上げるメカニズムの解明という研究項目 B01 の当初の目的は十分に達成されたと言える。

C01 顔と身体表現の比較現象学

C01 では、哲学的な観点から顔身体学の理論面での基礎の構築と、実証的な各研究の顔身体学における位置づけを考察しつつ、フッサールに始まる現象学の方法を応用、刷新することで、異なる社会文化的制度において身体性の変異と変容に注目する「比較現象学」の構築を目指した。実証的な各研究と共催を含む 5 年間にわたるシンポジウムなどの成果によりトランスカルチャー概念の再定義や洗練化、さらには関連概念とのネットワークを形成、整備した。また、以上の活動の中で、顔身体学全体としての研究倫理の問題が明らかになったため、顔身体学全体に共通の研究倫理のガイドラインを作成した。以上のことから当初の目的はおおむね達成したといえることができる。

(2) 主な研究成果

A01 顔と身体表現の異文化性検討

計画 A01-P01 「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究」(床呂 郁哉)

本研究班は、人類学的フィールドワークを含むフィールドサイエンスの研究手法を駆使し、顔と身体表現について、イスラーム圏を含む東南アジアなど各地における異なる文化・社会的文脈に応じた比較研究を遂行した。令和元年から令和 3 年度は、衣服、装飾、仮面、ヴェール、スカーフ、マスク着用など顔と身体表現に関わる項目に関して、コロナ・パンデミック状況に即したオンライン調査を含む調査研究を実施した。この過程で日本(ないし東アジア)発のいわゆる「オタク」文化・「カワイイ」文化が、マレーシアやフィリピン南部などムスリム社会を含む東南アジアの若者層にいかに越境し、受容されているかについて、「ヒジャーブコスプレ」などを含む新たな身体表現に注目して人類学的な調査を実施した。また、バリを対象に、現地のパフォーマンスアートにおける障害者をめぐる身体表現等をめぐっても研究を実施することができた。更に各メンバーによる個別の調査研究に加え、班全体での成果共有と本領域の他班との連携も兼ねて国内でのシンポジウムを毎年実施したほか、インドネシア人研究者を交えたオンラインの国際シンポジウムを令和 2 年 10 月に実施した。これらの成果は、『トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築(第 5 回)シンポジウム報告書』や *Proceedings of the international symposium "Performing the Self and Playing with the Otherness: Clothing and Costuming under Transcultural Conditions"*、書籍『わざの人類学』(業績 79) 等で公表・出版することができた。

計画 A01-P02 「顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究」(高橋 康介)

当初の研究計画の表情認知の高多様性に関するフィールド実験(2017~2019 年までタンザニア、カメルーン、ケニア、フィンランド、タイ、中国等計 16 回)を進める中で、表情認知より本質的な顔認知の高多様性が浮かび上がってきた。顔の図式化を求める描画実験では、西洋化された地域において目と口の三点からなる単純な図式が頻出するのに対して、カメルーンやタンザニアでは鼻や眉などのパーツが顕著に描かれた。さらに三要素からなる顔パーツを同定する際にも、目と口ではなく目と鼻や目とアゴという回答が多く見られた。このことは従来の西洋中心史観に基づく心理学が信じてきた顔認知の枠組みを根底から覆すものであり、トランスカルチャー時代の face-to-face コミュニケーションの中で極めて重要な知見である。

期間後半はコロナ禍によりフィールドワークの道が閉ざされたため、国内調査におけるさまざまな多様性研究、民族誌データベースや既存のフィールドデータを掘り下げた顔身体の高多様性に関する研究を行う一方で、人類学と心理学の融合についてチーム内で議論を重ね、新たな研究アプローチのあり方を模索した。その結果、定量的データと人類学的解釈の往復というシンプルな循環モデルは現実のフィールド実験では通用しないこと、一回起性のフィールドワークと再現性の実験の矛盾を止揚する形でフィールド実験を位置づける必要があることが明らかとなった(業績 12)。学際融合の重要性が謳われる研究界において極めてインパクトの大きい異分野融合の実践例となると考えられる。

公募班

山本班(A01-K105、A01-K204)は、国際シンポジウム「イレズミ・タトゥーと多文化共生—「温泉タトゥー問題」への取り組みを知る」を主催した(2019.3.30)。一般参加者 67 名、取材者 30 名以上が集ま

ったこのシンポジウムでは、M. ロッダー氏が「Japanese tattooing in the contexts of Japonisme in late 19th century Britain」、大貫菜穂氏が「イレズミのかたちと身体の形象との連環」を発表した。その後、タイ・マオリ・日本のストリートカルチャーから、フィールドリサーチに基づいたコメントがあり、芸術学や美術史、現代思想、文化人類学、ジャーナリストの視点から現状を検討した。コロナ禍でフィールド調査が難しかった時期には、19世紀後半の彫師「彫千代」の刺青下絵や資料を掘り起こした（業績 63）。さらに、2021年に立ち上げた「タトゥー文化研究会」の研究成果を、日本ではじめてのイレズミ研究論集『身体を彫る、世界を印す—イレズミ・タトゥーの人類学』として刊行した（業績 76）。医者やアイヌのアーティスト、映像ディレクター、英国の研究者 M. ロッダー氏が加わり、多彩な顔ぶれとなった。

田班（A01-K202）では、牧畜民マサイ社会における顔・身体の多様な認識と表現を理解するため、フィールド調査から得られた多様な現場での若者の高跳び実践を、民族誌とバイオメカニクスの研究方法を融合してその特徴を検討した。マサイの高跳びに競技性が薄く、かわりにリズムとそれに合わせた個々人の身振りが重視されていることがわかった。以上の結果をもって国際学術誌への投稿を進めているほか、スポーツ人類学会の招待を受け、令和4年9月に開催される「日本体育・スポーツ・健康学会大会第8回大会」において基調講演を受けている。運動疫学の研究者との連携によって子どもの身体活動と仕事・遊び参加の関連性を定量・定性的な分析から明らかにした。以上のほか、国際誌 *Techniques & Culture* にゲスト編集者として参加し、「わざ」をキーワードにした身体論と知識論の展開を紹介する特集号（6カ国の研究者からなる22篇の論考を含む）も刊行できた（業績 62）。

B01 顔と身体表現の異文化を作り上げるメカニズムの解明

計画 B01-P01 「顔と身体表現の文化差の形成過程」(山口 真美)

顔身体の文化差の形成過程の脳内機構の発達としては、正面顔と横顔の認知における縦断データに基づく発達段階と、顔処理と身体処理それぞれの脳内機構の発達について明らかにした。非定型な発達を示す ADHD 児を対象に、ADHD 児の持つ表情処理の怒り顔認識の困難さが、投薬によって変化することを脳活動から示した。また顔への注意に関する研究では、生後7-8ヶ月児が、0.1秒間隔で連続提示される視覚情報の中から顔を検出し、さらに人物同定までできることを明らかとし、生後半年以上の乳児では、視野の下にある顔よりも上にある顔に最初に注意が向く上に記憶もよいことを明らかとした。コミュニケーションとして重要な同調を調べた研究では、5-6ヶ月の乳児の瞳孔径への顔の重要性を示すことができた。海外との共同研究は論文投稿段階のものが多くが実験は終了し、声と口の動きの不一致から生じるマガーク効果の文化差について投稿中である。また、2022年の ICIS（国際赤ちゃん学会）の大会（7月）において、日本と海外でのコロナ下の顔認知発達に関するシンポジウムを、共同研究者であるカナダマクマスター大学の N. G. シャオ助教と企画している。

アウトリーチ活動では、NHK BS プレミアム「ヒューマニエンス 40億年のたくらみ」での「“顔”ヒトをつなぐ心の窓（2021.12.2）」の制作に協力することができた。また、「朝日新聞 GLOBE」（2021.2.7）では「マスクで変わる世界」の制作協力を、The Wall Street Journal（2021.10.31）でのマスクの記事でのコメントを、「クリスクぷらす—「多様な生き方」を伝える Web メディア」では中高生向けに「「マスクを取るのが怖い」の裏にある心理とは？ノーマスクの「自分の顔」と付き合うヒント」の話をし、乳児を持つ保護者向け雑誌「ひよこクラブ」でもマスクの顔についての注意喚起を行った。

身体知覚については、*Philosophy & Cultural Embodiment* 誌上で、乳児を対象とした身体知覚の研究で得られた知見をレビューし、身体が自己と他者を区別し、他者や身の周りの物体と適切に相互作用するための重要な役割を果たすことに関する考察を行った。

計画 B01-P02 「顔と身体表現における潜在的・顕在的過程」(渡邊 克巳)

顔身体における認知行動の潜在的・顕在的過程を取り扱う本研究班では、実験心理学的・神経科学的手法を用いた研究を幅広く進めてきた。中間報告までには、国際共同顔・表情データベースの構築、主観印象を操作できる顔構造統計モデルの構築、社会適応に関わる顔身体認知の社会・文化による影響などの研究を進めた。中間報告以降は、それらの研究成果やデータベース、顔構造統計モデルを活用した顔の印象研究を展開するとともに、身体運動・身体表現、視線と頭の向きの相互作用、顔認知と内受容感覚の関係の解明、身体動作の主体感などの研究を行うことで、より身体に意識をむけた展開を行った。例えば、公募班の磯村との共同研究では、直視されている状況では自分自身の心拍をより正確にカウントできる（内受容感覚が高まっている）ことを明らかにしている。これらの成果は、*Cognition*、*Journal of Vision*、*Journal of Experimental Psychology* などを含む35本以上の国際一流雑誌での成果発表につながっている。さらに、コロナ禍の影響により対面での国際共同研究は著しく制限されたものの、オンラインで文化差・

個人差研究を行う方法の開発やノウハウの蓄積を、イタリア・スイス・アメリカ・オーストラリアの共同研究者と積極的に進めてきた。顔の弁別や眼球運動への自他文化の影響など研究として、すでに複数の国際共同論文として発表しており、今後の研究にむけた新しい方法論として重要なものになると期待している。これらの成果や展開を含んだ学術的貢献を認められ、研究代表者の渡邊には令和2年度文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）が与えられている。また、これらの学術的な成果に加えて、シンポジウムの開催（例：「シンクロする身体—ポストコロナ社会における身体の未来像—」など）やメディアでの解説や出演（例：Wall Street Journal、NHK など）、対面やオンラインでのトークセッション（例：未来館トークなど）などを、他の計画班・公募班と共同して積極的に行うことで、本計画研究だけでなく、トランスカルチャー・顔身体といった概念の浸透と構築といった領域全体の社会でのプレゼンスと影響を高めることに大きく貢献した。

計画 B01-P03 「顔と身体表現における感覚間統合の文化間比較」(田中 章浩)

本研究班は、コミュニケーションの視点から顔身体学の発展に寄与するため、主として感覚間統合の視点から、顔と身体の文化差の形成過程とその基盤について以下のことを明らかにした。(1) オランダ人では一貫して相手の顔を優先させて感情を読み取る「顔優位」であるのに対し、日本人では顔優位から児童期を通して徐々に声優位にシフトすることを発見した。これは本研究班の最大の成果である(業績 41)。また、見た目がコーカソイドで日本語を話す相手には声優位で感情を知覚しており、トランスカルチャー状況における「境界」とは見た目ではなく、言語によって作られる側面があることを明らかにした(業績 46)。(2) 感情の知覚を起点として生じる一連の心理・行動をシステムとして捉え、視聴覚感情知覚から社会的行動へとつながる道筋について検討した。感情知覚と感情喚起の関連を示す「表情模倣」には、顔の部位によって、他者の運動の純粋な模倣が生じる部位と、他者の表情に対する評価と関連する部位があることを示した。また、独裁者ゲーム実験から、相手の感情知覚と利他的行動に用いられる手がかりは同一ではないことが示唆された。(3) トランスカルチャーの一例である成人移民を対象に fMRI (機能的磁気共鳴画像法) 実験を実施し、移住による異文化再適応によって顔の影響を受けやすくなり、視聴覚統合領域である pSTG (後部上側頭回) の活動パターンが変化することを明らかにした。(4) 中間評価を受けて身体に関する項目を充実させ、身体動作からの感情知覚は顔や声よりも発達的に後の段階で優位になること、ポジティブ感情はタッチから伝わりやすいことなど、それぞれのチャンネルがもつ特性とその文化差を明らかにした(業績 38, 40, 44)。身体拡張場面における適応的变化についても検討し、VR 環境では対象のサイズについて約 5%の過小評価が生じること、および触覚フィードバックの重要性を明らかにした(業績 42)。また、身体の重さが実際に変化した場合には、目的達成のために軌道を高くした運動制御戦略が用いられることを示した(業績 39)。

こうした研究成果とともに、コロナ禍でマスク越しやオンラインでのコミュニケーションにおける顔・身体への関心と重要性が高まる中で、これらのテーマに関する顔身体学での研究成果をメディアでの解説(業績 98 他)、トークイベント、オープンラボ(業績 94)等を通じて広く社会に浸透させることに貢献した。田中はこれら一連の成果を著書として書き上げ、2022年9月に刊行予定である(業績 74)。

公募班

人間の脳の視覚情報処理は、これまで経験した視覚入力 of 画像統計量を反映した形で、自己組織的に獲得されると考えられ、地域間での視覚経験の違いによる脳内情報表現の違いは、顔や身体表現の地域差を生みだし、これらの地域差が文化差の根拠の一つとなっている可能性がある。林班(B01-K115、B01-K215)では、教師信号を用いない機械学習や深層ニューラルネットワークの研究を行った。計画班 A01-P02 との共同研究として、さまざまな地域で撮影された顔写真の解析を行い、アフリカ・ヨーロッパ・東アジア各地の顔描画課題との関連を調べた結果、顔写真に現れる顔の特徴的要素と、その地域の顔描写時に描かれる特徴的要素との対応関係が見出された。

河原班(B01-K201)では、「衛生マスクが外見的魅力に及ぼすポジティブ・ネガティブな遮蔽効果」をテーマとした。研究開始が新型コロナウイルス感染症の世界的流行開始に一致したことで、衛生マスク効果を説明するために2016年にわれわれが提案した2要因モデルを、新型コロナウイルス感染症流行による社会変容を通して検証する機会を得た。東アジア地域では日常で衛生マスクを装着する文化が以前からあり、マスク装着は外見的魅力を変調していた。2要因モデルでは、この変調効果は平均化と不健康さによる魅力低下で説明していた。新型コロナウイルス感染症流行によって「マスク=不健康」という意味的関連が断ち切られたため、遮蔽によって魅力に関わる特徴が減るために、もともとの高魅力顔は魅力が低下し、低魅力顔は上昇するという予測を実証できた(業績 64)。Web 実験を活用し、国際比較も実施

できた（業績 55）。

工藤班（B01-K202）では、力学系数理モデル、オンライン実験、および映像/身体運動解析を用いたヒト認知行動の定量化により、対人間コミュニケーションを支える身体協調の役割を明らかにすることを旨とし、以下に示す知見を得た。(1) 対話する2者の関係性を第3者が評価する際には、2者の声と身振りが同等の役割を果たす（B01-P02 班との共同研究）。(2) 隣接して走る2名の陸上競技走者間には視聴覚的相互作用を介した運動協調が成立しうる。(3) 時と場所を越えた書画技法の継承には、筆先—身体運動の再現に加えて環境条件や課題制約の認知が存在する。これらの知見は全体として、対人間コミュニケーション研究における「環境に埋め込まれた身体と身体」という視点の重要性を示唆している。

C01 顔と身体表現の比較現象学

計画 C01-P01 「顔と身体表現の比較現象学」（河野 哲也）

本研究では、研究会、自主シンポジウム、学会大会の引き受けをこの5年間に行い、同時にアウトリーチ活動として哲学カフェを8回行うことで、顔身体学の理論面での基礎の構築ならびに研究情報の発信と学術交流の場を展開してきた。そのなかで、「カルチャー」という現象が、境界確定と越境、分離と融合、アイデンティティの安定化と再構築という矛盾した二方向の力のせめぎあいからできていることを明らかにし、「トランスカルチャー状況下」とは、単なる文化比較にとどまるのではなく、異文化が出会うところでそれぞれの文化そのものが常に更新される状況であると定義した。以上の定義に基づき、領域における計画班と公募研究班を包括した事典的な共著として『顔身体学ハンドブック』（業績 84）の出版を行うことで、実証的な各研究の顔身体学における配置が明確化し、トランスカルチャー状況下における顔身体学の全体像を提示した。また、「比較現象学」を展開するための土台として、哲学班が編集を行い、総括班の監修のもとで、立教大学学術リポジトリ内に英文雑誌 *Philosophy & Cultural Embodiment* を2号まで発刊した。この雑誌は、この分野の一流の海外の研究者を招いたピア・レビューによる、身体と文化の関係について哲学・心理学・文化人類学・社会学など学際的な研究を掲載する英語雑誌であり、今後の継続的な発展を可能にした。加えて、哲学対話などのアウトリーチ活動を分析するツールとして顔身体学アプリを開発した。このアプリは映像の操作、編集、書き込みが容易で、コメントなど多彩なメタ情報を書き加えることができるうえ、インターネットを介して遠隔から参加して分析や対話も行えるため、本研究のみならず領域全体のコロナ状況下での研究に大いに寄与した。

こうした活動と並行して、外見に基づく差別（ルッキズム）に、性差や人種に基づく差別が密接に関わっていることを明らかにし、差別の捉え方やそれへの取り組み方に関して現象学的観点から従来の枠組を刷新する試みを行ってきた。こうした知見を活かして、顔身体学をめぐる研究倫理ガイドライン作成にも取り組み、哲学・心理学・人類学など多分野にわたる研究者たちが向き合うべき課題を取りまとめ、2021年度に研究倫理に関する教育用動画を作成した。

公募班

田中咲子班（C01-K102）では、古代ギリシア・ローマ美術において、しばしば多様な文脈の中で見受けられる「（両）手を上げる」身振りに着目し、その意味の変遷過程を明らかにするとともに、変化をもたらした要因を美術史・社会的に説明することを目指した。身振りの図像表現を読み解く際には、生得的な身振りと社会的（後天的）なそれとを区別する必要がある。領域会議ではチンパンジーの専門家から種を超えた共通性について議論がなされるなど、身体をテーマとした人文科学と比較認知科学の融合が進んでいる。これを受けて、平成31年3月に班員3名が登壇する公開シンポジウムを早稲田大学で開催した（参加者は25名）。美術史と異分野との融合に、聴講者からは大きな関心が寄せられた。

田中彰吾班（C01-K203）では、身体性認知に基づく自己の見方を出発点として、従来の文化心理学における「日本的自己」をめぐる言説を「身体と社会の相互作用」の観点から批判的に検証した。新型コロナウイルス感染症の影響でフィールド調査が実施できなかったため文献研究に切り替え、日本固有の精神疾患とされてきた「対人恐怖症」について、その理解の歴史の変遷を辿った。主に明らかになったのは、対人恐怖症が20世紀前半の都市化の過程で「精神病理」として認知され始め、欧米との文化交流が少なかった1970年代までは日本特有の「文化結合症候群」とされたが、現在のトランスカルチャー状況下では世界共通の「社交不安障害」の亜型とされるに至っている、という歴史的経緯である。これらの成果は、和文書籍（業績 77）、英文書籍（業績 80）としてまとめた。

7 研究発表の状況

研究項目ごとに計画研究・公募研究の順で、本研究領域により得られた研究成果の発表の状況（主な雑誌論文、学会発表、書籍、産業財産権、ホームページ、主催シンポジウム、一般向けアウトリーチ活動等の状況。令和4年6月末までに掲載等が確定しているものに限る。）について、具体的かつ簡潔に5頁以内で記述すること。なお、雑誌論文の記述に当たっては、新しいものから順に発表年次をさかのぼり、研究代表者（発表当時、以下同様。）には二重下線、研究分担者には一重下線、corresponding author には左に*印を付すこと。

【主な雑誌論文】

A01-P01（計画：床呂）

1. Shioya, M. (2022). Clothing and identity in Indonesia and Japan. In Yoshida, Y., Ratiti, R., & Goto M. (Eds.) *Proceedings of the international symposium "Performing self and playing with the otherness: Clothing and costuming under transcultural conditions."* (pp. 23-26). Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies (TUFS) (査読無)
2. Goto, M. (2022). Masking culture and associated identities: The case of southern Iran. In Yoshida, Y., Ratiti, R., & Goto M. (Eds.) *Proceedings of the international symposium "Performing self and playing with the otherness: Clothing and costuming under transcultural conditions."* (pp. 44-46). ILCAA, TUFS (査読無)
3. 床呂郁哉 (2021). 『わざ』の人類学のための序章 床呂郁哉 (編) わざの人類学 (pp. 1-24) 京都大学学術出版会 (査読有)
4. 床呂郁哉 (2021). 身体変容の『わざ』としてのコスプレ：アート／テクノロジーを越えて 床呂郁哉 (編) わざの人類学 (pp. 63-86) 京都大学学術出版会 (査読有)
5. 吉田ゆか子 (2021). 奏でるわざと聴くわざ—バリと日本におけるガムラン音楽から考えるわざの連関 床呂郁哉 (編) わざの人類学 (pp. 51-58) 京都大学出版会 (査読有)
6. Tokoro, I., & Tomizawa, H. (2021). Introduction. In Tokoro, I., & Tomizawa, H. (Eds.) *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia* (Vol.3) (pp. 1-14) ILCAA, TUFS. (査読有)
7. Goto, M. (2021). Representing the Emirati Nation through Burqu': Local Identity or Imagined Community? In Kondo, Y. (Eds.) *The Arabian Peninsula: History, Culture, and Society* (pp. 67-91). (査読無)
8. Nishii, R. (2019). The "Face" and the other: Muslim Women Behind the Veil. In Kawai, K. (Ed.) *Others: The Evolution of Human Sociality* (pp. 283-301). Trans Pacific Press. (査読有)
9. 床呂郁哉・河合香吏 (2019). 新たな「もの」の人類学のための序章—脱人間中心主義のための可能性と課題 床呂郁哉・河合香吏 (編) ものの人類学2 (pp. 1-25) 京都大学学術出版会 (査読有)

A01-P02（計画：高橋）

10. *Ujiie, Y., & Takahashi, K. (2022). Associations between self-reported social touch avoidance, hypersensitivity, and autistic traits: Results from questionnaire research among typically developing adults. *Personality and Individual Differences*, 184, 111186. (査読有)
11. *Ujiie, Y., & Takahashi, K. (2021). Own-race faces promote integrated audiovisual speech information. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 75(5), 924-935. (査読有)
12. 高橋康介・島田将喜・田暁潔・銭琨・大石高典 (2020). 顔と emoji のフィールドワーク～異分野融合のフィールド実験で「顔を見る／読む／描く」に挑むフロンティア フィールドプラス, 25, 23-25. (査読無)
13. *Qian, K., & Yahara, T. (2020). Mentality and behavior in COVID-19 emergency status in Japan: Influence of personality, morality and ideology. *PLoS ONE*, 15(7): e0235883. (査読有)
14. *Takahashi, K., Oishi, T., & Shimada, M. (2017). Is ☺ Smiling? Cross-cultural Study on Recognition of Emoticon's Emotion. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 48 (10), 1578-1586. (査読有)

B01-P01（計画：山口）

15. *Tsurumi, S., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., & Kawahara, J. (2022). Development of upper visual field bias for faces in infants. *Developmental Science*, e13262. (査読有)
16. *Tsuji, Y., Kanazawa, S., & Yamaguchi, M. K. (2022). Face-specific pupil contagion in infants. *Frontiers in Psychology*, 12, 789618. (査読有)
17. *Kobayashi, M., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., & O'Toole, A. J. (2021). Cortical processing of dynamic bodies in the superior occipito-temporal regions of the infants' brain: Difference from dynamic faces and inversion effect. *NeuroImage*, 244, 118598. (査読有)
18. *Ujiie, Y., Kanazawa, S., & Yamaguchi, M. K. (2021). The other-race effect on the McGurk effect in infancy. *Attention, Perception, & Psychophysics*, 83, 2924-2936. (査読有)

19. *Nakashima, Y., Kanazawa, S., & Yamaguchi, M. K. (2021). Perception of invisible masked objects in early infancy. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 118, e2103040118. (査読有)
20. *Nakashima, Y., Yamaguchi, M. K., & Kanazawa, S. (2019). Development of center-surround suppression in infant motion processing. *Current Biology*, 29, 3059-3064. (査読有)
21. *Tsurumi, S., Kanazawa, S., & Yamaguchi, M. K. (2019). Infant brain activity in response to yawning using near-infrared spectroscopy. *Scientific Reports*, 9, 10631. (査読有)
22. *Tsurumi, S., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., & Kawahara, J. (2019). Rapid identification of the face in infants. *Journal of Experimental Child Psychology*. 186, 45-58. (査読有)
23. *Ichikawa, H., Nakato, E., Igarashi, Y., Okada, M., Kanazawa, S., Yamaguchi M. K., & Kakigi, R. (2019). A longitudinal study of infant view-invariant face processing during the first 3-8 months of life. *NeuroImage* 186, 817-824. (査読有)

B01-P02 (計画：渡邊)

24. *Dalmaso, M., Vicovaro, M., & Watanabe, K. (2022). Cross-cultural evidence of a space-ethnicity association in face categorisation. *Current Psychology*, 10.1007/s12144-022-02920-7 (査読有)
25. Palmer, C.J., Bracken, S.G., Otsuka, Y., & *Clifford, C.W.G. (2022). Is there a ‘zone of eye contact’ within the borders of the face? *Cognition*, 220, 104981. (査読有)
26. de Lissa, P., Sokhn, N., Lasrado, S., Tanaka, K., Watanabe, K., & *Caldara, R. (2021). Rapid saccadic categorization of other-race faces. *Journal of Vision*, 21(12), 1-17. (査読有)
27. *Kitamura, M., & Watanabe, K. (2021). Managed postures modulate social impressions after limited and unlimited time exposure. *Current Psychology*, 10.1007/s12144-021-01716-5 (査読有)
28. *Tanaka, T., Watanabe, K., & Tanaka, K. (2021). Immediate action effects motivate actions based on the stimulus–response relationship. *Experimental Brain Research*, 239, 67-78. (査読有)
29. *Tanaka, K., & Watanabe, K. (2021). Sense of agency with illusory visual events. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 42, 238-251. (査読有)
30. *中村航洋 (2021). 心理学における顔印象研究の動向と展望 エモーション・スタディーズ, 6(2), 20-27 (査読有)
31. *Isomura, T. & Watanabe, K. (2020). Direct gaze enhances interoceptive accuracy. *Cognition*, 195, 104113. (査読有)
32. *Matsuyoshi, D., & Watanabe, K. (2020). People have modest, not good, insight into their face recognition ability: a comparison between self-report questionnaires. *Psychological Research*, 84, 1. (査読有)
33. Palmer, C. J., Otsuka, Y., & *Clifford, C. W. G. (2020). A sparkle in the eye: Illumination cues and lightness constancy in the perception of eye contact. *Cognition*, 205, 104419. (査読有)
34. *Nakamura, K., & Watanabe, K. (2019). Data-driven mathematical model of East-Asian facial attractiveness: The relative contributions of shape and reflectance to attractiveness judgements. *Royal Society Open Science*, 6, 182189. (査読有)
35. Nguyen, A. T. T., Palmer, C. J., Otsuka, Y., & *Clifford, C. W. G. (2018). Biases in perceiving gaze vergence. *Journal of Experimental Psychology: General*, 147(8), 1125-1133. (査読有)
36. *Otsuka, Y., & Clifford, C. W. G. (2018). Influence of head orientation on perceived gaze direction and eye-region information. *Journal of Vision*, 18(12), 1–22. (査読有)

B01-P03 (計画：田中)

37. Oya, R., & *Tanaka, A. (in press). The interaction of emotional information from the voice and touch. *Acoustical Science and Technology*. (査読有)
38. Oya, R., & *Tanaka, A. (2022). Cross-cultural similarity and cultural specificity in the emotion perception from touch. *Emotion*, Advance online publication. (査読有)
39. Ando L., & *Itaguchi Y. (2022) The heavier the arm, the higher the action: the effects of forearm-weight changes on reach-to-grasp movements. *Experimental Brain Research*, 240, 1515–1528. (査読有)
40. Yamamoto, H. W., Kawahara, M., & *Tanaka, A. (2021). A web-based auditory and visual emotion perception task experiment with children and a comparison of lab data and web data. *Frontiers in Psychology*, 12, 702106. (査読有)
41. Kawahara, M., Sauter, D. A., & *Tanaka, A. (2021). Culture shapes emotion perception from faces and voices: changes over development. *Cognition and Emotion*, 35(6), 1175-1186.(査読有)
42. *Itaguchi Y. (2021) Size perception bias and reach-to-grasp kinematics: An exploratory study on the virtual hand with a consumer immersive virtual-reality device. *Frontiers in Virtual Reality*, 2, 712378. (査読有)

43. Yamamoto, H. W., Kawahara, M., Kret, M. E., & *Tanaka, A. (2020). Cultural differences in emoticon perception: Japanese see the eyes and Dutch the mouth of emoticons. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 11(2), 40-45. (査読有)
44. Yamamoto, H. W., Kawahara, M., & *Tanaka, A. (2020). Audiovisual emotion perception develops differently from audiovisual phoneme perception during childhood. *PLoS ONE*, 15(6), e0234553. (査読有)
45. Yamamoto, H. W., Kawahara, M., & *Tanaka, A. (2019). Japanese children's audiovisual emotion perception and its relation to their sensitivity to pitch-accentual pattern. *Acoustical Science and Technology*, 40(6), 410-412. (査読有)
46. Kawahara, M., Yamamoto, H. W., & *Tanaka, A. (2019). Language or appearance? The trigger of the in-group effect in multisensory emotion perception. *Acoustical Science and Technology*, 40(5), 360-363. (査読有)

C01-P01 (計画：河野)

47. Kono, T. (2021). Skilled performance of distancing in Kendo and its cultural significance. *Staps*, 132(2), 51-62. (査読有)
48. 小手川正二郎 (2021). 経験の記述は、なぜ批判的なのか？—フェミニスト現象学への諸批判に対する応答 現象学年報, 37, 19-29. (査読無)
49. 池田喬・小手川正二郎 (2021). 「人種化する知覚」の何が問題なのか？—知覚予期モデルによる現象学的分析 思想, 1169, 68-87. (査読無)
50. Kono, T., & Kotegawa, S. (2021) Embodiment in Transculture Conditions. *Philosophy & Cultural Embodiment*, Vol. 1 (1), 1-17. (査読無)
51. 小手川正二郎 (2020). 人種の現象学—人種化する経験と人種化される経験から人種差別を考える 國學院雑誌, 121 (8), 1-13. (査読無)
52. 小手川正二郎 (2019). 「男性的」自己欺瞞とフェミニズム的「男らしさ」—男性性の現象学 立命館大学人文科学研究所紀要, 120, 169-197. (査読無)
53. 河野哲也 (2019). 顔の比較現象学 日本顔学会誌, 19, 25-31. (査読有)
54. Kono, T. (2019). Phenomenology of Ma and Maai: An interpretation of Zeami's body cosmology from a phenomenological point of view. *New generation computing*, 37, 247-261. (査読有)

公募班

55. Dudarev, V., Kamatani, M., Miyazaki, Y., Enns, J. T., & Kawahara, J. I. (in press). The attractiveness of masked faces is influenced by race and mask attitudes. *Frontiers in Psychology-Cognitive Science* (査読有)
56. *Ueda, Y. (2022). Understanding mood of the crowd with facial expressions: Majority judgment for evaluation of statistical summary perception. *Attention, Perception, & Psychophysics*, 84(3), 843-860. (査読有)
57. Inagaki, M., Inoue, K., Tanabe, S., Kimura, K., Takada, M., & *Fujita, I. (2022). Rapid processing of threatening faces in the amygdala of nonhuman primates: subcortical inputs and dual roles. *Cerebral Cortex*, bhac109. (査読有)
58. Kurihara, K., Takahashi, T., & *Osui, R. (2022). The relationship between stability of interpersonal coordination and inter-brain EEG synchronization during anti-phase tapping. *Scientific Reports*, 12(1), 6164. (査読有)
59. *Chen N, Watanabe K, & *Wada M (2021). People with high autistic traits show less crossmodal correspondences between visual features and tastes. *Frontiers in Psychology*, 12, 714277. (査読有)
60. Tanaka, S. (2021). Beyond the "body-in-the-brain": A phenomenological view of phantom limbs, *Philosophy & Cultural Embodiment*, 1(1), 39-51. (査読有)
61. 中村耕作 (2021). 注口土器・香炉形土器の異形化・顔身体化と社会背景 季刊考古学, 155, 84-88. (査読無)
62. Tian, X. (2021). Un apprentissage « par les pieds ». L'éducation des enfants de pasteurs maasai (English: "Knowing by Feet" in the Growing-up of Pastoralist Maasai Children in the Savanna). *Techniques & Culture*, 76, 70-83. (査読有)
63. 山本芳美 (2021). 「日本みやげ」としてのイレズミ：十九世紀から二十世紀初頭における外国人観光と彫師 日本研究, 63, 43-83. (査読有)
64. Kamatani, M., Ito, M., Miyazaki, Y., & Kawahara, J. I. (2021). Effects of masks worn to protect against COVID-19 on the perception of facial attractiveness. *i-Perception*, 12(3), 1-14. (査読有)
65. Shimizu, D., & Okada, T. (2021). Synchronization and Coordination of Art Performances in Highly Competitive Contexts: Battle Scenes of Expert Breakdancers. *Frontiers in Psychology*, 12, 635534. (査読有)

66. Yamada, Y., Xu, H., & Sasaki, K. (2020). A dataset for the perceived vulnerability to disease scale in Japan before the spread of COVID-19. *F1000Research*, 9, 334. (査読有)
67. Matsuda, S., Omori, T., McCleery, J. P., & Yamamoto, J. (2019). Comparing reinforcement values of facial expressions: An eye-tracking study. *Psychological Record*, 69(3), 393–400. (査読有)
68. Hashiya, K., Meng, X., Uto, Y., & Tajiri, K. (2019). Overt congruent facial reaction to dynamic emotional expressions in 9–10-month-old infants. *Infant Behavior and Development*, 54, 48-56. (査読有)
69. Minami, T., Nakajima, K., & Nakauchi, S. (2018). Effects of Face and Background Color on Facial Expression Perception. *Frontiers in Psychology*. 9: 1012. (査読有)

【招待講演】

70. Takahashi, K. (2022.6.2-3). *Experimental psychology on face and body across fields*. FASU Pre-games International Symposium 2022, Kenya.
71. 高橋康介 (2021.9.11). 顔認知のフィールド実験からわかること、その難しさと面白さ 関西若手実験心理学研究会
72. 高橋康介 (2021.7.6). 『顔を見る』『顔を描く』その多様性を知る 顔学オンラインサロン
73. Takahashi, K. (2021.7.1). *Facing to diversity of seeing faces*. CiNet Friday Lunch Seminar

【著書】

74. 田中章浩 (2022.9 予定). 顔を聞き, 声を見る—私たちの多感覚コミュニケーション 共立出版
75. 山口真美・河野哲也・床呂郁哉 (2022.7 予定). コロナ時代の身体コミュニケーション 勁草書房
76. 山本芳美・桑原牧子・津村文彦 (2022). 身体を彫る、世界を印す—イレズミ・タトゥーの人類学 春風社
77. 田中彰吾 (2022). 自己と他者—身体性のパースペクティブから (知の生態学の冒険 J.J. ギブソンの継承 3) 東京大学出版会
78. 河野哲也 (2022). 間合い: 生態学的現象学の探究 (知の生態学の冒険 J.J. ギブソンの継承 2) 東京大学出版会
79. 床呂郁哉編 (2021). わざの人類学 京都大学学術出版会
80. Ataria, Y., Tanaka, S., & Gallagher, S. (2021) *Body Schema and Body Image: New Directions*. Oxford University Press.
81. 牧野遼作 (2021). 相互行為は楽し—遊戯としての相互行為分析の可能性 木村大治・花村俊吉 (編) 出会いと別れ—「あいさつ」をめぐる相互行為論 ナカニシヤ出版
82. 山口真美 (2021). Q&A: どうして「顔」が気になるのか? 河出書房新社 (編著) 見た目が気になる; 「からだ」の悩みを解きほぐす 26 のヒント 河出書房新社
83. Tokoro, I., & Tomizawa H. (Eds.) (2021). *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia (Vol.3)*. ILCAA, TUFS.
84. 河野哲也・山口真美・金沢創・渡邊克巳・田中章浩・床呂郁哉・高橋康介 (2021). 顔身体学ハンドブック 東京大学出版会
85. 山口真美 (2020). ことろと身体の心理学 岩波ジュニア新書
86. 小手川正二郎 (2020). 現実を解きほぐすための哲学 トランスビュー
87. 河野哲也 (2019). 人は語り続けるとき、考えていない: 対話と思考の哲学 岩波書店
88. 床呂郁哉・河合香吏編 (2019). ものの人類学 2 京都大学学術出版会
89. Tokoro I., & Kawai K. (2018). *An Anthropology of Things*. Kyoto University Press & Trans Pacific Press.
90. 河野哲也 (2016). いつかはみんな野生にもどる: 環境の現象学 水声社

【アウトリーチ・メディア】

91. 山口真美・金沢創 NHK BS プレミアム ヒューマニエンス「顔”ヒトをつなぐ心の窓」に制作協力と出演 (2021.12.2)
92. 田中章浩他 オープンラボ「ポーズと声でわかるかな?」日本科学未来館 (2021.10-12) 他計 78 日開催
93. 河原純一郎 マスク効果で顔の魅力アップ!? コロナ禍で変わった印象 "サイエンスポータル (2021.09.24)
94. 高橋康介 NHK チコちゃんに叱られる取材協力「なぜこの世には次々と人の顔が現れる?」 (2021.5.21)
95. 山口真美 「マスクで変わる世界」制作協力 (朝日新聞 GLOBE 2021.2.8)

96. 田中章浩 朝日新聞 DIGITAL 取材協力「マスク苦手な欧米、心理学に答えあり 日本人との違いは」(2020.6.20)
97. 高橋康介 AA 研アフリカンウィークス「アフリカで描かれた顔と身体たち」(2019.12.3-20)
98. 高橋康介 AA 研アフリカンウィークス「顔を描く・顔を描かれる・顔を知る」(2019.12.6)
99. 山本芳美 「入浴施設のタトゥーは是か非か「公平にすべき」「落ち着かず不愉快」W杯や五輪・・・外国人増で“タブー”に切り込む施設も」コメント掲載(産経新聞 2018.10.27)
100. 河野哲也他 顔身体カフェ:計10回(東京、金沢、福島、沖縄、香川、新潟など)

【ホームページ】

101. 顔身体学領域ウェブサイト (<http://kao-shintai.jp/>)
102. 顔身体学ブログ (<http://kao-shintai.sblo.jp/>)

【主催・共催イベント】

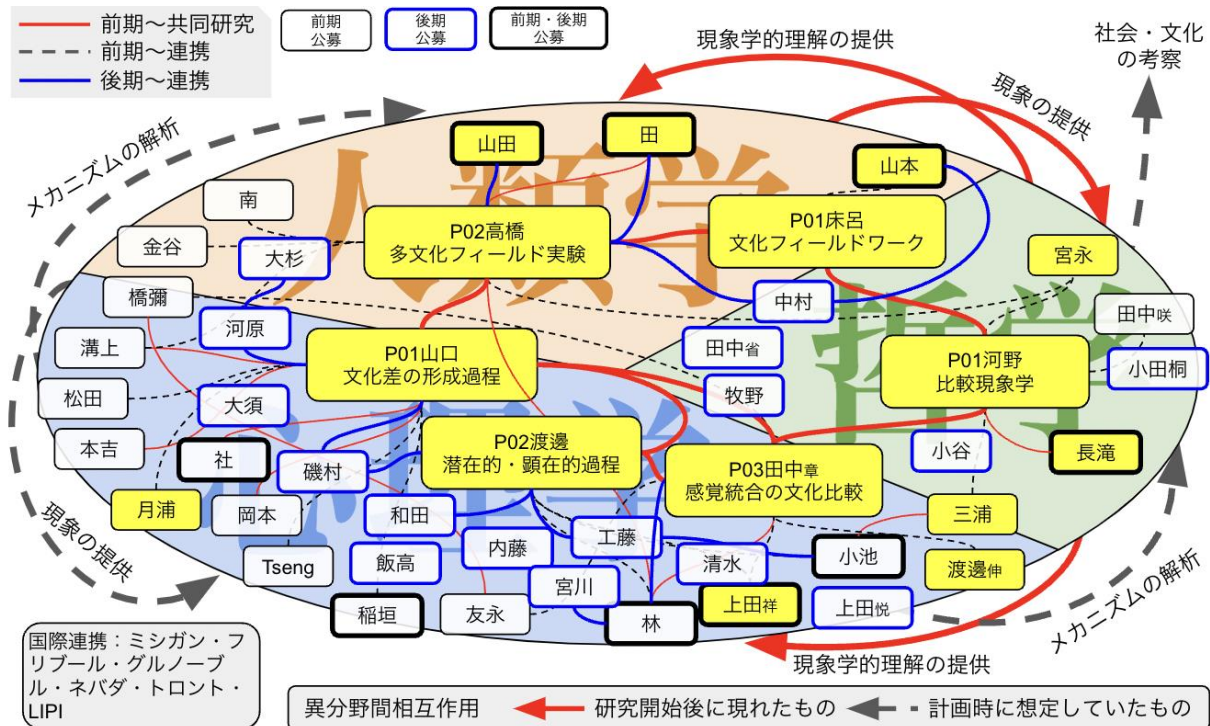
- 国際シンポジウム 13回(延べ1294名参加)
- 国際ワークショップ 6回(延べ240名参加)
- 国内シンポジウム 26回(延べ2391名参加)
- 研究会・読書会・合評会 32回(延べ1721名参加)
- 領域会議 9回(延べ840名参加) 他、計97回開催

イベント種別	時期	開催地	A01 人類学	B01 心理学	C01 哲学	タイトル・内容	延参加人数 (外国人) (外数)
[国際シンポジウム]	2020/10	online	○	○	○	「Performing the Self and Playing with the Otherness: Clothing and Costuming under Transcultural conditions」	92 (30)
	2020/08	online	○	○	○	「ミックスレイスの顔身体表象—学際的研究を目指して」	190 (3)
	2019/09	大阪		○	○	日本心理学会第83回大会公募シンポジウム「顔認知の発達と障害と」	80 (5)
	2019/03	東京	○	○	○	「トランスカルチャーとは何か?心理学と哲学の協働」	110 (2)
	2019/03	東京	○			「イレズミ・タトゥーと多文化共生—「温泉タトゥー問題」への取り組みを知る	150
	2018/11	東京		○	○	ショーン・ギャラガー教授招聘シンポジウム「匿名の視線と自己の成立」	50 (1)
[国際ワークショップ]	2018/11~ 2020/01	東京		○		心理班若手合同ワークショップ(計2回)	70 (7)
	2019/09	札幌		○	○	「臨床神経学と現象学」	11 (4)
	2018/03	バリ島	○	○	○	「顔・身体学」バリ国際ワークショップ	23 (40)
[国内シンポジウム]	2022/03	東京 + online	○	○	○	公開シンポジウム『顔認証倫理—デジタルリスクとその克服』	75
	2021/11	online	○	○	○	第3回身体性公開シンポジウム「シンクロする身体」	183
	2021/08	online	○	○	○	「顔身体の進化と文化」(立命館大学総合心理学部と共催)	200
	2021/02	online	○	○	○	第2回身体性公開シンポジウム「身体再考」	379
	2020/12	online			○	公開シンポジウム「障害と身体運動 間身体的交流」	85
	2018/07	神戸		○		日本神経科学大会シンポジウム「個性と身体表現の創発に関わる神経機構」(新学術領域「個性創発脳」と共催)	100
[国内ワークショップ]	2017/12~ 2021/12	東京	○	○	○	AA研公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」(計5回)	318 (6)
	2021/09	online	○			公開ワークショップ「表現する身体と見つめる身体:森田かずよ氏(義足のダンサー)×井桁裕子氏(人形作家)」	106
	2020/11	online		○		心理班若手合同ワークショップ	24
[研究会]	2018/02~ 2022/02	東京		○		心理班若手公開研究会(多摩知覚研究会と共催 計14回)	316 (8)
	2018/08~ 2021/09	東京		○		HIP研究会「顔身体学」セッション(計4回)	236
[アウトリーチ]	2022/03	東京		○	○	サイエンス×哲学カフェ「身体×心=わたし?~哲学の課題を心理学実験と対話から探る」	25
	2017/12~ 2019/12	東京		○	○	顔身体カフェシリーズ(計5回)	127
	2018/07	東京		○		トークイベント「ヴァーチャル世界でワタシはどうなる?」	80

○ 主に関わった分野
分野横断的なイベント

8 研究組織の連携体制

研究領域全体を通じ、本研究領域内の研究項目間、計画研究及び公募研究間の連携体制について、図表などを用いて具体的かつ簡潔に1頁以内で記述すること。



上図に研究期間を通じた領域内連携状況を示す。本領域は人類学、心理学、哲学の三分野を中心に、公募班からは考古学、人工知能、芸術などの分野からの参画もあった。これらの異分野間で多数の萌芽的連携および共同研究が進められ、顔身体に関する新たな学問領域を形成、確立するに至った。領域全体では総括班の指揮の下で連携促進の体制を構築した。具体的には顔身体学ハンドブック出版（計画・公募含め15班が参加。上図黄色班）、哲学班主体の顔身体アプリ、バリ島身体芸術フィールドワーク、顔身体倫理ワークショップ教材、コロナ禍により直接交流できない状況ではZoomレクチャー「哲学作法」「心理学作法」「文化人類学作法」シリーズなどを実施した。領域発足前には分野間で隔たりが大きかった顔身体研究の目的・方法・倫理について異分野間で概念や情報を共有し、各研究班同士の連携に至った。

審査時の所見で指摘のあった人類学分野では、前期から後期にかけて複数の計画班・公募班でフィールドや研究手法を共有し継続的な連携・共同研究を行った（床呂=高橋=公募山田=公募田）。後期にはイレズミ研究に関する資料研究連携も進んだ（公募山本=高橋）。心理学分野では計画班中心に多種多様な連携が展開された（脳：山口=田中、山口=公募岡本/心理物理：山口=渡邊=公募溝上/AI：田中=公募林、公募宮川=公募林/インタラクション：公募小池=公募三浦=公募工藤/医学：山口=公募社/マスク：公募河原=山口/内受容：公募磯村=山口=渡邊/多感覚：公募和田=渡邊）。また眼球運動計測、脳波計測、国際表情データベース（渡邊+フリブール大学）など顔身体研究に有用な実験手法と機材の共有が進められた。哲学分野ではアプリ開発共有（河野=公募長滝）を通じた連携などが進められている。

顔身体という共通のテーマに対する異分野間の連携も活発であった。海外も含めた心理学と人類学（フィールドワーク）の連携（山口=渡邊=高橋+グルノーブル大学+フリブール大学+ネバダ大学+トロント大学）、人類学研究とAI研究（高橋=公募林）、身体表現に関する心理学と人類学的研究（公募河原=公募大杉）、考古学の顔身体と人類学（公募中村=公募山本=高橋）、そして哲学班による異分野融合哲学カフェの開催（河野=山口、高橋、公募田）など、ユニークな連携、共同研究が展開された。

なお公募班同士の連携について、2020年以降の領域会議が現地開催できなかった影響は大きく、前期（2018-19年度）公募班の活発な連携に比べて、後期（2020-21年度）はやや停滞した。本領域に限ったことではないが新学術領域研究における領域会議が異分野連携を促進する効果は極めて大きかったものと理解でき、コロナ禍収束後に再び現地領域会議を通じた活発な連携の創出が期待できる。このような状況において総括班を中心に複数分野の公募班が議論し情報交換する場（主にオンライン）を数多く設けることで、異分野間の相互理解という面では当初想定した以上の進展があり、新しい学問領域の創出に直接的につながった。

9 研究費の使用状況

研究領域全体を通じ、研究費の使用状況や効果的使用の工夫、設備等（本研究領域内で共用する設備・装置の購入・開発・運用、実験資料・資材の提供など）の活用状況について、総括班研究課題の活動状況と併せて具体的かつ簡潔に2頁以内で記述すること。また、領域設定期間最終年度の繰越しが承認された計画研究（総括班・国際活動支援班を含む。）がある場合は、その内容を記述すること。

■総括班（および一部計画班）

物品費：各計画班予算にて、以下の機器を購入し、領域内での共同研究時に利用している。各班で同じ機材が必要になった場合に、できるだけ機種を揃えるということも、今後の共同研究を可能にする工夫として実践されている。

- ▶ 山口班 EEG 乳児用脳波計ならびに NIRS 乳児用プローブアップデート（2019年度、540万円）、Eyelink 視線計測装置（2020年度、300万円）
- ▶ 渡邊班 モーションキャプチャー（2017年度、170万円）、TOBII 視線計測装置（2017年度、400万円）、視覚刺激呈示ディスプレイ（2017年度、117万円×2）、デジタル脳波計（2018年度、650万円）
- ▶ 田中班 TOBII 視線計測装置（2019年度、300万円）

旅費：9回の領域会議関連旅費（評価委員招聘や若手旅費助成含む）で440万円、領域主催イベント（シンポジウム、ワークショップ、哲学カフェ等）への国内招聘者旅費などで125万円、国際活動支援関連旅費で1460万円（詳細については下記に別途記載）を支出した。

人件費：事務局員（中央大学）雇用経費を支出したほか、領域主催（共催）シンポジウム、研究会、講演会等の外部講演者に対する講演謝金（5年間で135万円）を支出した。その他、研究倫理教育用ビデオ制作、VRソフトプログラミング等の委託報酬として約50万円を支出した。

その他① イベント開催費用：以下のイベントの開催費用を支出した。主に会場費だが、2020年度以降は配信業務委託費が追加された。

- ▶ 領域会議 第1回（2017.12 東京外大）から第9回（2021.03 高松ハイブリッド）まで全9回、総額約540万円。
- ▶ 国際シンポジウム・ワークショップ バリ国際ワークショップ（2017年度）、ショーン・ギャラガー教授招聘シンポジウム（2018年度）、「トランスカルチャーとは何か？」シンポジウム（2018年度）、ミックスレイスの顔身体表象（2020年度）心理班若手合同ワークショップ（2018-19年度）他13件 総額230万円（除く旅費）
- ▶ 国内シンポジウム 公開シンポジウム「シンクロする身体」（2021年度）他25件 総額630万円
- ▶ 国内研究会・ワークショップ 心理班若手合同ワークショップ（2020年度）他33件、総額7万円
- ▶ 哲学カフェ 全5回
- ▶ オンライン読書会（2021年度、全7回）

その他② 諸経費：領域ウェブサイト立上げおよび5年間の保守管理費として88万円、ニュースレター（1号～3号）発行・配布費用として430万円、顔身体アプリの開発（2017年度430万円（哲学班支出））およびアップデート（2021年度、340万円）、国際電子ジャーナル *Philosophy and Cultural Embodiment* の刊行費用（2020-21年度、各75万円）、顔身体学ハンドブック刊行に伴う出版社への業務委託費（2020年度、40万円）、研究倫理教育用ビデオ制作（2021年度、200万円）などを支出した。

■国際活動支援

以下の招聘は総括班予算によって行っているが、同時に国際共同研究の打ち合わせも兼ねることで旅費の節約にも努めており、機材の節約にも繋がるというように、各費目が相乗効果を生み出す効果的な使われ方となっている

国際イベント（シンポジウム・講演会・ワークショップ）開催関連旅費

- ▶ 顔身体学国際ワークショップ（2017年度、バリ島）日本からの関係者渡航旅費（88万円）
- ▶ 日本心理学会大会公募シンポジウム「顔魅力の心理学」（2018年度、仙台）にカリフォルニア工科大学の下條教授招聘（55万円）
- ▶ シンポジウム「匿名の視線と自己の成立」（2018年度、東京）にメンフィス大のギャラガー教授招聘
- ▶ シンポジウム「トランスカルチャーとは何か？哲学と心理学の協働」（2018年度、東京）に米国から講演者2名招聘（72万円）
- ▶ APCV（Asia Pacific Conference of Vision）企画シンポジウム2件（2019年度、大阪）にミラノ・ビッコカ大学より講演者2名を招聘（68万円）
- ▶ 日本心理学会公募シンポジウム16「顔認知の発達と障害と」・日本顔学会大会サテライトシンポジウム「顔の科学：内側から見る顔」（2019年度、大阪・札幌）にボーンマス大学のJ.コール教授を講演者

として招聘（40万円）

- ▶ ヴィクトリア大学のジェームズ田中教授を招聘し、顔認知の全体処理をテーマに講演会を開催（2019年度、東京）

国際共同研究関連旅費

<2017年度>

渡邊班・山口班 フリブール大学（スイス）カルダラ教授と、表情データベース作成に関する研究打合せを行った（85万円）

山口班・渡邊班 ミシガン大学（米国）北山教授と、文化比較実験に関する打合せを行った（76万円）。

山口班・高橋班 グルノーブル・アルプ大学（フランス）パスカリス教授と、発達実験に関する打合せを行った（170万円）

<2018年度>

山口班・渡邊班・溝上班（公募）ネバダ大学（米国）ウェブスター教授と異文化環境比較研究に関する打合せを行った（176万円）。

渡邊班・田中班 ミシガン大学北山ラボの研究者2名を招聘し、国際共同研究を行った（93万円）。

山口班 ミラノ・ビッコカ大学マッキカシア教授を招聘し乳児実験に関する打合せを行った（35万円）。

<2019年度>

山口班 ミラノ・ビッコカ大学ナバ研究員を招聘し皮膚電位反応実験に関する打合せ（国際シンポに計上）を行った。

渡邊班 ミシガン大より北山教授と研究者1名を招聘し国際共同研究を行った（78万円）。

山口班・高橋班 ミラノ・ビッコカ大学マッキカシア教授を招聘し文字配列の文化差に関する研究の打合せを行った（27万円）。

山口班・渡邊班 グルノーブル大学パスカリス教授を招聘し国際共同研究の打合せ（23万円）を行った。

若手研究者育成関連旅費

<2018年度>

山口班 プリンストン大学 N. G. シャオ研究員をマガーク効果の異文化比較実験のため短期受け入れた（20万円）。

心理班 心理班合同で若手研究者研究発表ワークショップ（東京）を開催し、ミシガン大学の北山教授、グルノーブル大学のパスカリス教授をアドバイザーとして招聘した。同時にグルノーブル大学大学院生の短期受け入れも実施した（82万円）。

山口班 ロンドン大学の石津研究員を異文化比較研究打合せのため約1ヶ月間受け入れた（27万円）。

<2019年度>

河野班 中国山西大学より大学院生3名を短期受け入れし、北大で開催された国際ワークショップ「臨床神経学と現象学」で発表させた（海外旅費は先方持ち、北大への旅費15万円を支出）。

山口班 ロンドン大学より大学院生1名を、顔と声の文化差に関する研究のため短期受け入れた（34万円）。

心理班 心理班合同で若手研究者研究発表ワークショップ（東京）を開催し、カナダヴィクトリア大学のジェームズ田中教授がアドバイザーとして参加した。

田中班 共同研究先であるライデン大学・マーストリヒト大学（オランダ）にラボの若手研究者3名（院生2名、研究者1名）を研修および共同研究の実験実施のため、1ヶ月程度派遣した。コロナのため、派遣期間を若干短縮せざるを得なかったが、目的はほぼ達成できた。（200万円）

以上のように、研究費は適切な用途に使われており、さらに可能な限り領域内での共有を心掛けることで、効率よく使えるように努めてきた。

<最終年度繰越が承認された班について>

総括班および6計画班が最終年度予算を繰り越している。コロナ禍によって海外の研究協力機関との往来が途絶えたため旅費の支出が激減したことが大きな原因である。

10 当該学問分野及び関連学問分野への貢献の状況

研究領域全体を通じ、本研究領域の成果が当該学問分野や関連学問分野に与えたインパクトや波及効果などについて、「革新的・創造的な学術研究の発展」の観点から、具体的かつ簡潔に1頁以内で記述すること。なお、記述に当たっては、応募時に「①既存の学問分野の枠に収まらない新興・融合領域の創成を目指すもの」、「②当該領域の各分野発展・飛躍的な展開を目指すもの」のどちらを選択したか、また、どの程度達成できたかを明確にすること。

本研究領域は、顔身体が無意識営みの意識化を通じて、異質なものが共存する社会の中での顔と身体表現が持つ可能性を、トランスカルチャーという概念の検討を基盤としながら、心理学・文化人類学・哲学の視点を融合し乗り越えることを志向して、既存の学問分野の枠に収まらない新興・融合領域の創成を目指すものであった。

研究期間の前半においては、哲学班を中心として心理学と文化人類学の視点も盛り込んだ議論を集中的に行い、「トランスカルチャー」という現象が、複数のレベルにおける矛盾した二方向の力のせめぎあいからできていることを明らかにし、「トランスカルチャー状況下」を異文化が出会うところでそれぞれの文化そのものが常に更新される状況であると定義した。この領域全体の研究の基軸を固めることで、様々な研究分野からの自由な発想での公募研究の参加を可能にしながら、ブレのない領域の展開を行うことができ、人文社会系からだけでなく、総合系・理工系・生物系のすべての系からの研究者が参加し連携する異例の新学術領域になったと言える。例えば、元々の仕掛けとして項目 A01 に組み込まれていた実験心理学と文化人類学の連携は、今まで実験室に籠もりがちであった実験心理学者をフィールドに連れ出し、文化と社会に埋め込まれた顔身体を体験させるとともに、文化人類学者に（いわゆる）科学的手続きの辛さと喜びを伝える試みであったが、その成果はお互いの学問分野の更新につながっただけでなく、短期間の間に学術論文としても発表されているという点で特筆すべきものである。本研究領域では、これ以外にも、「8 研究組織の連携体制」に記述されているような多くの連携や融合（あるいは、せめぎあい）を起こすことで、学問分野の壁を揺さぶり続け、それから生まれる知見を学術的価値として蓄積してきた。それによって、領域以外の関連学問分野へのインパクトも必然的に生じ、例えば他の新学術領域との合同シンポジウム（例：個性創発脳、出ユーラシア、対話知能学）などでは、新しい研究のアイデアと共同研究が生まれることとなった。本研究領域は、既存の学問分野の枠に収まらない領域の創成を目指す領域のモデルケースであると自負できる。

このような多様な学問領域の越境を起こしながら、研究領域を包括した事典『顔身体学ハンドブック』（業績 84）の出版を行うことで、各研究の顔身体学における配置と構造を明確化し、トランスカルチャー状況下における顔身体学という新たな学問領域の基盤作りを達成した。さらに、本研究領域をスタート地点とし、身体と文化の関係について学際的な研究を掲載する査読付き国際学術雑誌 *Philosophy & Cultural Embodiment* を創刊し、S. ギャラガー、T. チェメロ、J. M. ロワ等のこの分野の第一人者を編集委員に迎えることで、当該学問分野や関連学問分野へインパクトを継続し、国際的な領域の発展を起こせるような点も強調したい。また、顔身体に関わる差別に関する国際性を視野に入れた議論は、顔身体を研究することそのものの意味に立ち戻るものとして、領域を超えて関連学問分野や社会に広く伝えるべきものであるという認識のもと、多分野にわたる研究者たちが向き合うべき課題を取りまとめ、顔身体学をめぐる研究倫理ガイドライン作成の中で研究倫理に関する動画を作成している。

また、社会に開かれた学問（あるいは社会のなかの学問）を領域の基本方針とすることで、アウトリーチにも力を入れてきた。化粧・イレズミ・人種・スポーツ・障害・魅力・ルッキズム・テクノロジー・アイデンティティ・共感・表現などといった多彩な観点から論じる場を、哲学カフェ・シンポジウム・研究会・読書会などの形で積極的に作り、現代社会における顔身体からの逆照射を研究の中にとりこむ試みを継続的に行うことで、当該学問分野や関連学問分野と社会とつなぎ、当該学問分野や関連学問分野への波及効果やインパクトの射程を広げることにつながっている。

本領域の成果が当該学問分野や関連学問分野に与えたインパクトや波及効果は、コロナ禍を含む社会の劇的な変化もあって、当初の予想を遥かに超えたものとなり、既存の学問分野の枠に収まらない新興・融合領域の創成は十二分に達成された。さらには、そこから派生した、想像された身体・リアルな身体の検討や、芸術・パフォーマンスの意味を実践と実証を通して確認する必要性への気づきは、本学術領域の各分野発展・飛躍的な展開を目指すことで、革新的・創造的な学術研究の発展につながる可能性があることも確認された。

11 若手研究者の育成に関する取組実績

研究領域全体を通じ、本研究領域の研究遂行に携わった若手研究者（令和4年3月末現在で39歳以下。研究協力者やポスドク、途中で追加・削除した者を含む。）の育成に係る取組の実績について、具体的かつ簡潔に1頁以内で記述すること。

本領域においては、若手研究者の育成を、①若手研究者自身への研究サポートと連携の機会の創出、②領域内外との共同研究の推奨と促進、③海外共同研究の推奨と促進の三つの側面から推進してきた。

①若手研究者自身への研究サポートと連携の機会の創出

本研究領域においては、研究組織を構成する際に、若手研究者の積極的な採用（計画班への参加・公募班での採用）を行なってきた。さらに、採用した若手研究者のインセンティブの確保のために、若手研究者による自主的な研究会の支援も行なってきた（電子情報通信学会 HIP 研究会、知覚研究会、合同ワークショップでの英語による発表、顔身体カフェへの参加など）。また、全9回行った領域会議でのポスター総発表数323件中215件（67%）が若手による発表だった。若手対象にポスターアワードを4回実施し、ポスター発表179件中130件は若手研究者（公募班の若手研究者も含む）によるものとなり、そのうちアワード対象のポスター発表は82件であった。他にも、本領域が主催した国際シンポジウム（「トランスカルチャーとは何か？」（2019.3.2-3））では、最大で講演者10名中8名が若手研究者という、異例の若手率となっている。これは、本研究領域における若手研究者へのサポートを反映しており、領域の原動力が若手研究者であったことを示している。

②領域内外の共同研究の推奨と促進

若手研究者の育成には、研究者本人の研究の推進や研究内容の深化、研究ネットワークの拡張に向けた共同研究の経験と、それによる研究業績の蓄積が必要であるという認識から、上記の若手研究会や領域会議の場を活用して、共同研究を開始あるいは展開することを推奨してきた。その結果、計26件の国内共同研究が行われており（領域内：19、領域外：7）、若手研究者の業績の多くはこれらの共同研究によるものである。この数字は、39歳以下の若手研究者が中心となって行っているものだけである点も強調したい。また、本領域の集大成の一つとして、教科書としても使える「顔身体学ハンドブック」（業績84）を出版したが、その執筆者の多くも領域の若手研究者であり（42名中18名）、新しい視点を取り入れた形のハンドブックになるとともに、若手研究者自身と研究分野の認知、さらなる共同研究の推進につながった。このような、領域内の共同研究のきっかけとしては、上記の領域会議や若手研究者同士のワークショップが重要な役割を果たしており、共同研究が有機的に拡張して行く場として非常に有効であった。

③国際共同研究の推奨と促進

本研究領域は、本質的に国際共同研究を前提としている。この点に加え、本研究領域を国際的に認知された学問領域とするためにも、若手研究者が中心となって海外との共同研究を行うことを推奨し、それを可能にするような体制作りを行った。具体的には、若手研究者を海外へ積極的に派遣し、海外共同研究の開始または促進を行った。さらには、若手研究者自身による外国人研究者の招聘も5回以上行われている。その結果、若手研究者主導による国際共同研究は20件以上にのぼっている。国際共同研究先としては、領域内で既に連携している連携機関をハブとした共同研究の拡張に加え、若手研究者が自分自身で開拓した連携先も10を超え（ラトガース大学、シカゴ大学、ヨーク大学、ウィーン大学、エセックス大学など）、順調な研究が行われており、今後の展開や拡張も期待できる。これは研究期間後半のコロナ禍の状況で行われていたものであり、かつ②の国内共同研究と同様に、国際共同研究もシニア研究者が行っているものを除いた数字であることを考えれば、驚異的な国際共同研究の進展であると言える。

これら若手研究者の育成への取り組みは、若手研究者の流動性とキャリアアップにも確実につながっており、多くの常勤職への就職に繋がっている（教授2名、准教授10名、専任講師6名、助教・助手6名、研究員6名）。また、日本学術振興会特別研究員PD及びDCに14名が採用、海外特別研究員にも7名採用、また領域に参加した外国人若手研究者が2名外国人特別研究員に採用されており、若手研究者が自身の研究を行うキャリアパスを着実に見出している。

さらに、研究そのものの質と研究内容の認知の向上にもつながっており、若手研究員の研究に対して、複数の学会から8回の学会賞が、日本心理学会・日本基礎心理学会・日本認知心理学会・電子情報通信学会を含む関連学会での研究発表に対して27回の発表賞が与えられている。特に、国際的に優れた業績を持つ中堅・若手心理学者に授与される日本心理学会国際賞奨励賞を2名の若手研究者が受賞（令和4年3月末現在で39歳以下でないものも含めば4名）したことは、本研究領域の国際性を示すとともに、科学技術分野文部科学大臣表彰「若手科学者賞」（令和3年度）が領域若手研究者による学際的な研究に与えられたことは、本領域が若手研究者を通じて、日本の学術の発展と新しい展開に寄与してきたことを示している。

12 総括班評価者による評価

研究領域全体を通じ、総括班評価者による評価体制（総括班評価者の氏名や所属等）や本研究領域に対する評価コメントについて、具体的かつ簡潔に2頁以内で記述すること。

富沢 壽勇（静岡県立大学・特任教授）

本研究プロジェクトは「新学術領域研究（研究領域提案型）」の名にふさわしいダイナミックで活気あふれる研究組織運営と活動を展開し、質の高い研究成果をもたらした。何よりもまず研究組織としての構想が実に巧みで、顔身体学という新領域の開拓に向けて心理学、文化人類学、哲学の三本柱を軸に各分野の視座や方法の長所を相互に援用しつつ、脳科学研究を駆使し、更に社会学、美学、化粧学、歴史学などの観点も加えて、人文・社会科学分野を再構築するという挑戦を着実に積み重ねてきた。当評価者の専門の分野で言えば、文化人類学は法則定立的な自然科学的アプローチを補足すべく、顔身体現象に関わる幅広い多様性に富んだ社会文化的脈絡の視点を常に提示し続けることによって、研究プロジェクト全体に広い比較の視座と民族誌的な奥行きのある知見を加えることに大いに貢献している。本研究が社会文化的脈絡を重視していることは主題の中の「トランスカルチャー状況下」や副題の「多文化をつなぐ」という表現に文化概念が繰り返されていることにも端的に示されている。本研究の中間評価で要請された文化概念の再検討の結果、「トランスカルチャー状況下」とは『文化』の壁を取り壊す力とそれを作る力が同時に働いているような状況」という定義が明示されたのは特筆すべき成果と言える。また「多文化」や「文化差」などの概念に関しても、顔身体学の更なる発展に向けてこれらの用語をどのように精緻化し整理して行くのかなど今後の検討を期待したい。

いずれにせよ、本研究では9回の領域会議、39回の国内外のシンポジウム、32回の研究会等が開催され、多彩で積極的なアウトリーチ活動やメディア出演も行われ、研究班ごとに著書や質の高い内外の学術雑誌への寄稿論文も極めて豊富な成果として公表されているのは高く評価できる。「領域の結びつきを実証する最大の成果」として『顔身体学ハンドブック（2021年3月）』の刊行を自己評価で挙げているのも大いに首肯できるもので、これによって顔身体学という共通の目標に向けての人文社会科学の統合的アプローチ、あるいは文理融合的なアプローチ開拓の可能性のため、関連の方法論や問題領域が明快に整理、解説、提示されており、今後の顔身体学研究の重要な基本文献となって新たな研究を創出する苗床となることが大いに期待できる。

本研究組織への若手研究者の登用も極めて積極的で高い参加率であり、研究活動全体が活気をもって進められたこと背景にあるとすら言える。プロジェクト後半は不運にも新型コロナ禍によって実験研究もフィールドワークも大きな制約を受け、特に若手研究者のキャリア形成上、大きな困難となったが、マスクの着用・非着用をめぐる顔身体学的考察などの重要トピックが新たに加わり、また方法論的にもオンラインを活用した実験や異分野融合的なフィールド研究の手法が新たに開発され、研究討議でいかにも本研究プロジェクトらしく拡張身体を駆使した議論が実験的に試みられたりなどして通常の研究会以上に多方向的かつ長時間に及ぶ白熱した討議が展開したのは想定外の成果となった。いわば逆境を克服して革新的な研究法を開拓することにつながり、新しい研究領域での異分野協働の機運も促進され、共に切磋琢磨して行く研究者の共通のプラットフォームが構築されたと言える。もちろん本研究組織の中には各専門分野の既存の確立された方法や枠組みに依存した研究もまだ少なくないが、本プロジェクトが顔身体学という新たな方法と枠組みの貴重な学術基盤形成をしたことは間違いない。

柿木 隆介（自然科学研究機構生理学研究所・名誉教授）

新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現」は、領域代表者が、「異質なものが共存していく社会の中での顔と身体表現が持つ可能性、顔と身体を使いこなすことにより異文化理解を促す可能性を、心理学・文化人類学・哲学の視点から、既存の研究分野の枠組を超えて共に検討していきたい」と、「研究領域の目的及び概要」で強調しているように、非常に興味深いテーマを取り上げていた。また新学術領域研究にふさわしいユニークかつ斬新なプロジェクトとして、発足当初から研究者間でも大きな期待を寄せられていた。しかし、逆に、あまりにも斬新かつ大胆な研究領域であり、また研究領域を構成する研究者達が、一騎当千の個性的なメンバーであったため、途中で空中分解あるいは迷走するのではないかという危惧があったことも否定しない。しかし、最終的には、大きな成功を収めたことを強調したい。これは領域代表者である山口真美教授の卓越したマネジメント能力と人柄の良さ、そして各計画研究代表者たちの献身的な努力によることは間違いない。また、個性あふれる公募研究者たちのユニークな研究内容には、研究発表会の場で大いに楽しませていただいた。通常の学会では味わえない興奮を覚えたことは、50年近い研究歴を有する私にとっても、嘗てないほどのとても楽しい思い出であった。

評価者の専門領域は、脳科学、特に心理学と認知科学であるため、主としてB01班の活動について評価する。

中央大学の山口真美教授は、領域代表者として領域のマネジメントを行うかたわら、研究者としてもすぐれた業績を上げてきた。乳児を対象とした顔認知研究は国際的にも高い評価を受け、カナダ・アメリカ・フランス・イタリア・スイス等の多くの研究者との国際共同研究も積極的に進めてきた。いずれも

非常に優れた研究内容であり、メディアによって国内外に広く紹介された。

早稲田大学の渡邊克巳教授は、幅広い分野において高レベルの研究を行い、国内のみならず、国際的にも高い注目を集めている俊英である。本研究領域では、特に「国際共同顔・表情データベースの構築」、「主観印象を操作できる顔構造統計モデルの構築」、「顔認知能力の個人差の推定法」、「社会適応に関わる顔身体認知の社会・文化による影響」、の4テーマについて着実に研究を進めてきた。

東京女子大学の田中章浩教授は、コミュニケーション研究に関する第一人者である。「顔・身体学」領域には、コミュニケーションに関する研究が必須であり、本領域のキーパーソンの一人である。本研究領域では、顔・身体・声の認識様式の文化的多様性の根源として、感覚間統合に着目し、幼児期から成人にかけて感情知覚における複数情報統合の様式がどのように変化するかを比較文化的に検討することにより、これらの知見を統一的に説明する理論的枠組みの提唱を目指してきた。特に、「オランダ人では顔を優先させて読み取る「顔優位」であるのに対し、日本人では「顔優位」から児童期を通して徐々に「声優位」にシフトする」ことを明らかにした研究は非常に興味深いものであり、今後のさらなる研究の発展に期待している。

公募研究者に関しては、本研究テーマにおける俊英を網羅しており、選考委員会の見識の高さと、冒険を恐れない人選能力に高い評価を与えたい。もちろん、まだまだ未熟な研究も散見されたが、今回の学術領域での採択をバネとして、今後の新たな切り口からの研究の進展に大きな期待を寄せている。

村田 純一（東京大学・名誉教授）

本研究のテーマは、グローバル化の進展する世界のあり方を、多様な文化が交流し、あるいは衝突する「トランスカルチャー」状況ととらえたいうえで、そこで生じている出来事を顔と身体を媒介として生じる生身の人間同士の相互交流のあり方に焦点を当てて解明することに置かれている。関連する研究分野は、心理学、脳科学、認知科学、文化人類学、そして哲学などであり、具体的に組み込まれたのは、顔認知や身ぶりの相互作用などのようなマイクロな次元での現象の実験研究やフィールドワークであり、あるいは、他者理解や心身問題の現象学的な哲学的考察などである。

以上のように、本研究は、顔と身体を介した相互作用というマイクロな場をおもな研究対象としながら、その研究をトランスカルチャー状況と名づけられたマクロな視点と結びつけることによって推進する点に特徴をもつ。しかしこの特徴は同時に課題の困難さを示すものでもあり、実際、研究の初期には必ずしもこの点が明確化されないために、個々の研究の位置づけに不明確さが残っていたように思われる。ところが、この困難さは、領域代表を含む総括班の努力もあって、むしろ研究の推進力に変えられていったともいえるだろう。

その結果、ひとつには、トランスカルチャーという概念に関して、たんに異なる文化同士が交じり合うというだけではなく、その過程は同時に新たな対立を生むダイナミックな過程であることが明確化されるとともに、トランスカルチャーという概念が普遍化され、同じ文化圏内部でも、例えばトランスジェンダーと呼ばれる現象や様々な差別が生まれるあり方にも適用可能なものとしてとらえられ、そのおかげで、マイクロなレベルでの顔身体を介した相互行為を多次元的に見る視点が可能となり、個々の個別研究間の関連づけがより明確化されるようになったと評価できる。

もうひとつ、「トランスカルチャー」と呼んでいた現実の世界のなかで起きた出来事が予期されなかった仕方で本研究にもたらしたインパクトをあげねばならない。

例えば、研究期間の前半にアメリカで人種差別をめぐって起きたBLM（Black Lives Matter）運動は、人種や差別という言葉で現わされる問題が顔身体と密接に関係していることを示すと理解され、こうした問題関心から、人種と差別をめぐって学問分野横断的な新たな研究テーマと視点が生まれることになった。さらには、研究期間の後半では、新型コロナウイルスのパンデミックによって、生身の相互行為が制限されると同時に、マスク生活を強いられることによって、文字通り、顔と身体をめぐり新たな状況が生まれることになり、それがただちに研究の中心課題となった。この新たな事態は、研究者がいわば自分の体験している生活世界のなかで顔と身体のあるあり方を反省せざるをえなくなり、生活世界と実験室が地続きになった状況ともいえる。このようなあり方は、基礎研究と応用研究といった既存の区別ではとらえられない新たな研究のあり方を示唆しているともいえるだろう。

こうした事情は、本研究によってなされた実に多様なアウトリーチ活動についてもいえる。様々な公開シンポジウムや哲学カフェなどが開催されたが、それらはたんなる研究の紹介や宣伝以上の意味をもっていたように思われる。

コロナ禍という新たな状況によって、本研究も、他の研究同様、様々な制約を受けることになり、多くの計画が中止や変更を余儀なくされた。しかし、そうした状況下でも、特に若手の研究者による努力によって、オンラインでの多くの研究会や大規模な領域会議が工夫を凝らした仕方で開催可能となった。若手研究者の育成と支援を重視してきた本研究の成果でもあったと評価できる。